

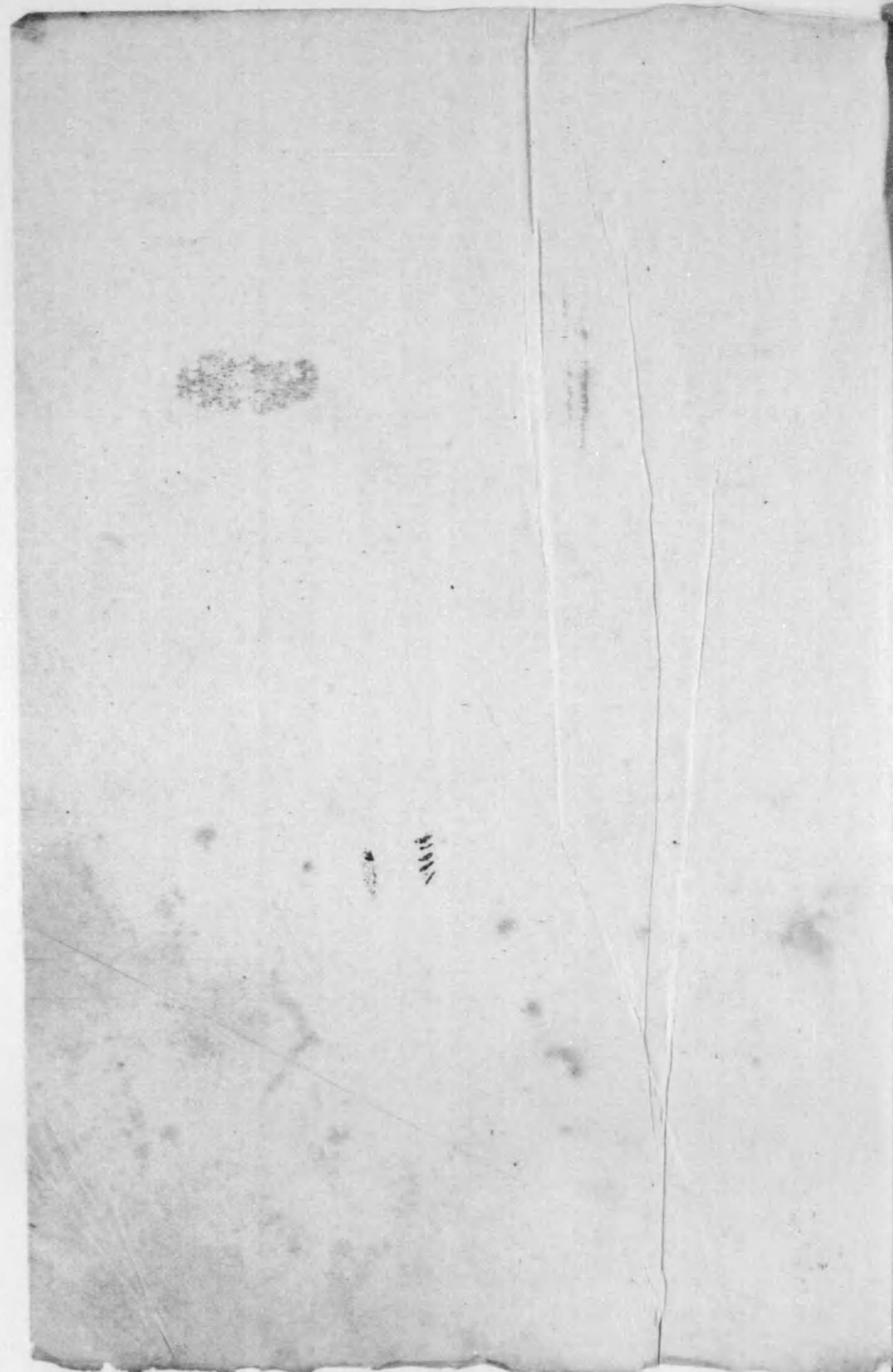
329

186



始





P. Nobile d'Annunzio

329-186



大正  
2. 9. 12  
内交

111

オチンヌンダ・レエエリブガ

説小薇薔

# 利勝の死

譯庵戲川石



京 東  
社 會 式 株 書 圖 本 日 大



本篇は明治四十五年六月以降の「スバル」に載  
せられたる G. d'Annunzio の *Trionfo della Morte* の  
譯に若干の修正を加へたるものなり。譯文は  
G. Herelle の佛譯に、必要の限り伊文の原書を對  
校して作れり。諸國の譯本の齊しく省略した  
る章句と雖、殆ど原書に據りて填補し盡せり。  
唯篇中二三の空行を存したるは、我が國情の容  
認を危疑して闕文したる部分なり。

—譯者。

著者 G. d'Annunzio

譯者 G. Herelle

# 死の勝利

著者 G. d'Annunzio



大日本出版株式会社

われ今君の名を、ああ修道の高士よ、特に君の意に適つた此の書の巻頭に置く。嚴肅なる藝術と靜寂との地に在つて、稀らしいまで緩々とわが書き續けた此の書の巻頭に置く。

最後の半葉を書き了へた時、君がわれと共に感じたのは、あの卒然と襲ひ來る空頼めの悦であつたが、暫時にして春の黄昏は如何にも清い悲哀の面衣を其の上に被せた。而して又君がわれと共に憶ひ出したのは、既に程經て遠くなつた彼の夕まぐれ、里離れしたわが僧房に君が訪ひ來た其の折柄

フランチェスコ・パオロ・ミケチに與ふ

Francesco Paolo Michetti

の愁であつた。其の時彼の修道院の大静寂裡君が好みの飲料の湯氣が盃の中から立ち騰つて二人の知性の熱が中空に廣がるやうに見えた間、われは新たに書き了へた文章を君の爲に高音で讀み上げた。晝間の苦い争の後、如何にも此の休息は甘く且望ましかつた。藝術家の望み得べき至上の悦は、まだ手附かずに秘め置いた作品を、其の同輩に向つて、即ち凡てを了解する人に向つて示すことには無いか。

二人は屢々近代散文の理想とすべき作品に就いて語り合つた。それは詩のやうに音と節奏との變化を具へ、其の文體は筆に現れた言語のさまざまな力を綜合して——知識のあらゆる種類、不可思議のあらゆる種類を調和し、學術の精確と空想の魅惑とを相交替せしめて、自然を模倣するにあらざ、寧ろ之を延長する如き作品。脚色の羈絆を脱し、文藝のあらゆる巧を以て一の特殊なる生命、即ち普遍生命の中心に置かれた一個人の——感覺上、情操上、知力上の——特殊生命が創作せられるやうな作品がそれであつた。

君は此の思想の反映を不幸にして或はその影が頗る薄からうが、此の書の全體を一纏めに味ふ時、認めることであらう。

茲に現れる「登場人物」は單獨である。而して——わが力の及ぶ限の技巧を盡して——此處に書き現したのは宇宙に對する此の人物特殊の觀相である。更に適當の語を以てすれば、君の尊い祖先レオナルドオの言つた如く、人間が世界の模型である以上、此處には此の人物の宇宙が書き現されて居る。渠が特殊の情感と外界との間に起る原動反動の争は、直接觀察の精確な地合の上に据え附けてある。渠の感情も觀念も趣味も習慣も、とにかく嚴密な論理の助を假りて、頁から頁へと發展して行く事件の推移に連れて轉變することは無く、却つて變化すべきものと固定するものと、恆久不易の形式と其の場かぎり偶發の非論理なる形式との間に一定の均勢を保つて、首尾一貫した有機體生命に存する主要性格が現れて居る。冒頭の頁に現れた一の感想、一の情操、一の初一念は、——色相界を支配する諸原則に従

つて——種々の表號の聚つて居る鬱然たる森林を通過してだんだん發展して行くと、其處には廣博にして透明なる唯一の精神の中に、萬事悉く互ひに照應して居る。ピッチャオ山の腰掛に發したあの空にして辛辣な言葉から、絶壁の縁に於ける夜陰の恐ろしい争鬭に至るまで、書中の「人物」は常に明かな自覺の状態を持續して、感覺し思考し且活動して居る。つまり此處には巧に組み合せた脚色の連續は無い。併し「時」の限られた期間に三重の方式を以て現れた個人性の連續が在るのである。

特に又茲に——若し内部生命を其の豊富にして雜駁なる形に於て現さうとするわが試が、偏に唯美しく現さうとする試にも優る力を具へ得たと望めるにしても——特に茲には美と詩との作品、即ち心像と音楽とに富んだ、造形術の風もあり交響體樂の趣もある一の散文を創始しようとする目的がある。

伊太利亞に於て近代風なる敘事記述の散文を建設する爲、有效の貢獻を、

しようとする、これこそわが最も固執する大望である。

吾が邦の小説家はた記述家の大多數が、其の必要の爲に採用して來た普通語は、ただの數百に過ぎない。渠等は俗語の直截にして活氣ある實を全く知らず顔にうち過ぎ、甚だしきは之を目して貧弱である、殆ど拙惡であるとする者もある。多數作家の使用する單語は、不確實にして不精密、其の起原は不純であり、流俗の濫用に依つて色褪せ形崩れ、原始の意義は曲解轉化せられて、不同反對の事物を表示して居る。且これらの單語は、常に殆ど同様な句切に竝列せられ、相互の連絡頗る拙く、節奏と稱すべきもの全く缺けて、心像を與へようとする事物の精神運動と何の照應も無い。

されど我等の國語は、苟も徐々として世々に積み來つた其の寶庫を認知し、透見し、剔出する入念の作家に取つて一の悦である、又力である。其の或る物は絶えず搖動し變化し、又或る物は表皮に發して顯れ、他は奥底の深みに隠れて未だ人の眼に觸れぬ、驚異を藏して居るのは、後世の穿鑿家を酔は



しめるものであらう。  
 嬌やかな無数の嫩枝が生ひ茂る羅甸の鬱蒼たる大樹から支れたわれ等の國語は、苟もそれを、曲げつ編みつ更になほ輕かな花環更になほ撓やかな花綵に造り得るだけの力と巧とを具へた者の意思に反抗することはあるまい。

譬喩を離れて言ふならば、伊太利亞語は決して他の歐洲語の孰れをも羨み、又孰れにも借用を申し込む謂はれは無い。近代世界の外面のみでなく最も複雑にして最も異常なる「精神状態」今迄解剖家の自負し來つた精神状態をも餘蘊なく再現し得て、人間心理の學はここに尊重せられて居る。

伊太利亞小説家の新派は今此の學に傾いて居るやうだが、心理描寫を目的とする作家は、其の内省の結果を發表するに當つて、他に比類無く豊かな語彙を有つて居て、感情や思想や強ひ難い夢に至るまで、其のごく微かな捉へ難い波動をも、きびきびした確かさを以て紙上に留めることが出来る。

而して又此の頗る精密な表號とともに、如何にも變化に富んで效果の多い、ワグネル風の大管絃樂にも比肩すべき音樂上の要素を具へて、「音樂」より外に近代の精神に暗示する能力の無いやうな物をも暗示する。

尤も、一般精神の現状から餘りに遠く、餘りに懸け離れた古代小説の作風に似た特色を、後世の作家に求めることは出来ない。吾が邦の古小説家は、唯動作を敘述するのみで、其の動機に對して何の好奇心も無かつた。哀しい、又は面白い事件の筋に心を奪はれて、偏に單純な感覺上の生命を創作することを役目と思ひ、人の心の特質に關する研究の如きは、擧げて僧院の士に委せたのである。

それ故新時代の心理描寫家が神父等と連絡を附けたいならば、彼の隱者や決疑家や、或は公衆に向つて説教し講義し又は獨語する人々に求めて可い。即ち其の交を結ぶべきは、フラアテ・ダ・スカルベリア、ボオノ・ジ・ムボオニ、カテリイナ・ダ・シエナ、ジョルダノ・ダ・リバルタ、カヴルカ、パッサグンチの徒である。

Caterina da Siena

Giordano da Ripalta

Cavalcà

Passavanti

勤んで十字架の鏡に我が姿を映し、思を凝らして「安慰の國」に逍遙し、常に怠らず交々オリゲエネスの徒となり、又聖ベルナルツスの徒となれ。

將又音樂の如く美しい散文の典型を求めむとすれば、往昔の盛期を離れてはならぬ。吾が邦の最大なる言語の工人等は、羅甸の雄辯について節奏を研究した。言語の音樂は羅馬で話されてそれから書かれた。初めは演壇からうち廣がり、次いで卷物の符號の中に閉ぢられたのである。マルク

スツリウス・キケロが、なかば歌ふ如くに其の掉尾の力ある長語を唇の上に調節して、聽く人の内心に劇しい搖動を生じたやうに、チツス・リキウスは十

*Iulius Cicero*

*Titus Livius*

部の史書に勁健なる文體の妙を以て羅馬氣質の雄大を敷衍し、詩人と聲調の美を競つた。この二人は、音節がその精神上の意味の外に、これを組みなす音調のうち、人を搖り動かす一種の力を有することを熟知して居たのである。

新國語の君主ボッカチオも亦此の不思議を知らずには居なかつた、また

*Boccaccio*

等閑にもしなかつた。渠は屢々其の豊富なる章句の聲調に變化を興へる爲に、女性の長閑なる媚道ならぬ戀の甘さを更によく現す爲に、頗る鋭敏な耳を有つて居た。フイレンツォラの口數多い透き徹つた聲の中にも亦、時としてピベンチオの朗らかな丘を下る泉川の調が流れて居る。而して紙の上に符號を書き止めることを始めた彼のアンニバル・カロは、其の心の裡に選りぬきの美しい言葉の反響を聞いたのである。其の餘韻は宛も隠れた洞のなか、新月状の入江の傍、あの二人の羊牧が語り合ふ艶になまめいた歡樂の囁に似て居る。

されば君は、ああ修道の高士よ、わが今君の爲に書き上げた此の散文の中に、若干の精確な心像、若干の高雅な節奏を認めるであらう。われ此の散文を胸に抱くこと五年、常に之を富まし之を補つた。古人が「死の勝利」の圖を描いて、其處に果敢ない「生」の美をとり集めたやうに、この「勝利」に於てもわれは屢々

音と色と形との祭を  
執り行

つたのである。

われは光明と美音と芳香とを以て、一人の死に近づいて行く者の悲愁と不安とを包被し、其の煩悶の周圍に最も邪惡な現象を喚起して、渠の斜なる歩みの下に、さまざまの色に染めた敷物を展げた。又此の死ぬ者に對して置かれた驕樂の美女は、軍營に整列したる兵士の如く恐ろしく、朱の小船の散り浮いた緑の大海の幽玄の上に高く居て、うみ熟した果物の實を噛み味ひ、食ひ食ふその口元から頸のあたりをかけて、蜜を溶したやうな甘露が滴り傳つて居る。

又われは君の爲に、ああ修道の高士よ、此の書中に我等郷人の古い詩趣を述べた。君が始めて了解し、永く愛して已まぬその詩趣である。狂妄の信仰に祈られる空の下、幾百年の苦辛に耕された土の上に住む我等が郷人の

悦と愁との圖は茲に描かれて居る。彼の死に近づく者も亦屢々聖なる春の吐息が中空かすかに吹き過ぎるを感じ、<sup>力</sup>の我が身に降るやうに、生を與ふる執成手<sup>の</sup>名を呼んで、怪しいまで美しい大牛が遠くアドリアの海へ導びいたといふ清い若侍の受領の地を思ひ出したのである。而も昔アル<sup>Alba</sup>、<sup>Athlino</sup>、<sup>de Marsi</sup>シなる鬼が城の石壁に、ヌミ<sup>Nunitha</sup>ディアの王シ<sup>Sylax</sup>フ<sup>Macedonia</sup>ックスとマ<sup>Macedonia</sup>ケドニアの最後<sup>Iurses</sup>の王、暴君ベル<sup>Demetrio Anispu</sup>セエスとが俱に僵れた如く、<sup>Zarathustra</sup>デ<sup>Demetrio Anispu</sup>メトリオ<sup>Demetrio Anispu</sup>アウリス<sup>Demetrio Anispu</sup>プの悲惨なる嗣子は、餘所人として、流人又俘囚として、葡萄染の衣に裹まれて此處に滅ぶ。山陰に眠る渠の靈よ、とこしへに平安なれ。

ああ修道の高士よ、我等は大<sup>Zarathustra</sup>ツ<sup>Zarathustra</sup>ラツ<sup>Zarathustra</sup>シ<sup>Zarathustra</sup>トラの聲に耳を敲てて居る。而して藝術の確乎たる信仰を抱いて、超人の到來を準備して居る。

一八九四年四月朔日

サンタ・マリア・マッジョレ修道院にて。

G. D. A.

一 過去

1172

王

...



羣集は胸壁に凭れて眼の下の往來を瞰込んでゐる。イッポリイタは變に思つて佇立つた。

「何てせう。」と聲が突走つた。

氣遣はし氣な態度を一寸見せて、ジョルジョを引留めるといふ風に我知らず男の腕に手を懸けた。

ジョルジョは羣集の動靜を見廻してから、「誰か高處から墜落ちたのだらう。」

言つて又「もう歸らうか。」と附足した。  
好奇心と恐怖に挟まれた女は稍躊躇つた。

「まあ見て行きませうよ。」

二人は胸壁に沿つて歩いて道の終端まで來た。

イッポリイタの歩調は自然に早く羣集の方へ向つた。

三月の午後のビンチオ(羅馬北郊の公園)は寥れて見えた。折々聞える物音も灰色の重つたるい空氣の中へ消込んで行つた。

「依然然うだ。自殺だ。」ジョルジオが言つた。

二人は羣集に近づいた。物見の人々は眼の下の登石の上に皆きつと視線を落した。それは遊惰な労働者風の者ばかりであつた。どの顔面にも哀情や悲愁の影は見られなかつた。視線が動かずに居るので野獸のやうな彼等の眼に何となく怖い色が翳つてゐた。

若い男が一人息急き見に來た。漸く好い場所に落着いたと思ふ時分に、

物見の一人が凱歌を揚げるやうな茶化したやうな聲で呼掛けた。

「遅い遅い。もう擔いて行つちやつたい。」

遅い客は佳い幕が見られないと言つたやうな得意な調子であつた。

「何處へ。」

「サンタ・マリヤ・デル・ポポロへよ。」

「死んぢやつたか。」

「死んぢやつた。」

憔悴けた蒼ずんだ顔の頸に大きなマフラを捲いた男が身體を半分突き出して覗き込んでゐた。と、匿へたパイプを抜取つて大聲に、

「何だそれや其處にあるのは。」

口が片方へ引釣つて火傷の痕のやうなものが粘り附いてゐる。苦い唾液が引切なしに湧く所爲てか痙攣も見える。胴間聲は洞穴から出て來るやうであつた。

「何だそれや其處にあるのは。」

その時は一人の馬丁が下の往來で、絶壁の裾へ寄つて蹲居むところであつた。羣集は馬丁の返辭に聴き耳を立てて皆静まり返つた。登石の上には黒い痕がぼたぼた見えた。

「血だよ。」蹲居んだまま馬丁が答へた。

鞭の尖て速りに血泥を攪拌してゐる。

「外にや何も無えか。」パイプの男が訊く。

馬丁は起ち上つた。鞭の尖に何か附着けて引張つた。壁上からは分らなう。

「髪の毛だ。」

「色は？」

「ブロンド。」

高い壁と壁の間に異様な共鳴が起つた。

「もう行きませうよ、ねえ。」イ、ポリイタが男に強請んだ。

あどあどと顔まで蒼くして戀人の腕を振つた。男は羣集に混つて胸壁に身を凭せ、可怖しい光景に魂を奪はせてゐた。

二人は竊とこの物凄い場を外した。互の胸には可傷しい死の思想があつた。悲愁は外貌にも讀まれた。

「幸福だな、死人は。」偶とジョルジョが口走つた。「死人に懷疑は無う。」

「それやあ然うね。」

疲れた調子の物言ひに、無限の落膽を想はせた。

女は頭を傾げた。悲痛に哀惜の混じたやうな心持で、

「戀つて悲惨なものね。」

「孰の戀さ。」ジョルジョが訊いた。心は外に行つてゐる。

「お互ひの……。」

「だんだん醒めて來たといふのか。」

「私は那樣ことありませんけど。」

「俺の方が冷くなつたと言ふんだらう。」と突込んだ。

隠し切れない苛立たしい心持は、鋭い言葉になつて出た。疑と女を見据

ゑて復た斯う、

「俺の方が冷くなつたと言ふんだらう。ええ？ 然うぢやないか。」

返辭がない。女の頭は次第に垂れ下る。

「返辭をしない？ 眞箇の事を言はなかつた證據だ。」

沈黙が続いた。相互ひに對者の心が讀みたいと無言の中に焦つた。

「這麼ことから戀の苦痛が始まるのだ。未だお前は氣が附くまいが歸つて來るとから、熱くお前の素振を見て居ると、一種の徵候が毎日俺の眼に這入る。」

「甚麼徵候？」

「不良な徵候だ。戀はする、それで居て鋭い知覺は失はない。思ひ出して

も竦とする。」

女は憤怒の表情に變つて首を振つた。顔が曇つた。又しても二人の戀人の間に、讎敵の念が萌した。——それは是迄とても度度あつた例だ。見當違ひの邪推、そして心が傷つけられることを互ひに感じた。人知れぬ反逆的な憤怒は、互の胸にあつた。時時それが破裂すると、残忍な挽回しの附かない言葉となつて出る。執念深い八當りにもなる。罪の擦り合ひにもなる。譬へがたい激情に擒はれた二人は、各各自身を苛むのみであつた。心を引裂いて賛にする外はなかつた。

イッポリイタは悄けて沈黙した。額に小皺の紋が寄つた。唇は緊く結び合つた。ジョルジオはそれと見て熱れるやうに微笑んだ。

「依然這麼ことから始まるのだ。」眼は女から放さずに不氣味な微笑を洩らしつつ、「胸の底に不安が踏つてゐるのだらう。何となくじれつたいやうな壓へても壓へ切れない、一緒になれば俺を可厭がる氣が自然に涌くの



だ。それもお前には奈何することも出来ない。そこで沈黙と来る。——露骨に言つちまふには非常な努力が要るからだ。俺の言ふことは一一取り違へる。奈何でもいいやうな事でも、無意識にだらうが、必とお前は拗れて来る。」

女は遮らうとするやうな身振すら見せなかつた。それを冷澁と釋つて飽くまで窘る氣てますます言ひ募る。彼の氣質に然うした發作がある爲ばかりでない。冷靜な批評的の眼それが修練の結果で、一層銳利に、一層藝術的に出來てゐたのであつた。解剖をするといふ習慣から來た精密と正確、そして自己を描く癖が始終彼にあつた。が、獨りて喋る時には、自分の心を標準にするから、觀察に照らした心の状態は誇張された。そして對話の場合には、聰明から來る先入見て、情緒の誠實は失はれた。随つて、他人の心に發見する筈の隱微な動機を見損ふことがあつた。研究や書物から得た心理觀察の結果が、ごたごたと頭腦の中に一ぱい這入つて居た。それに累

はされて、自他の觀察は大抵正鵠を外れて行つた。

「いか。決して怒りはしない。お前の罪でない事は解つてゐる。感情には誰にも一定の分量がある。時が來れば減える。これは避くべからざる事だ。絶大な力を働つて來ても、戀情の滅盡を遮ることは不可能だ。思つて見れば俺を愛して呉れてから随分長かつた。二年にもなる。四月二日は第二回目の記念日だ。那樣事を思つて見たことがあるか。」

黙つて女は頷いた。ジェルジョは又獨り言のやうに、「二年にも！」ベンチを見附けて腰を卸した。女は疲れた溜息とともに沈み込んだ。神経を斷切られたやうな衰弱が見えた。司教の乗つた重い黒塗の馬車が、下の街道の磊石を蹴立てて通つた。喇叭の音が幽かにフラミニア通の方から聞える。その後は復た舊の沈黙が周囲の木立を包んだ。ばらばらと雨が來た。

「今度の記念日も陰氣だらう。」可憐しい伴侶を前にして、然も無慈悲に續

けた。「けれども依然相當な祝賀はしなければなるまい。俺は苦い物が好きだ。」

痛痛しい微笑に、女の悲哀は仄見られた。意ひ掛けない優しい聲で、

「何爲那樣暗証ばかり言ふの。」

男の眼の中を探るやうな眼附で凝と眺め込んだ。聽て互ひの心を讀まうとする念が二人に起つた。男に持前の可怕しい痲痺のあることは克く知つてゐる。毒毒しい惡態の出所も、大抵は想像される。言ふだけ言はせて了ふのは、胸を霧らさせる途であつた。

「奈何なすつたの。」

斯う言つた調子には、男の待ち設けなかつた優しみがあつた。幾らか彼は狼狽へた。對者に自分が理解されたと同時に、感されたのだとも氣附いた。自己を感む心が其處から出て、胸に擴がつた。深い情緒が全身を揺つた。

「奈何なすつたの。」復た斯う言つて男の手に纏つた。優しい心を更に感覺の力で強く感じさせた。

「奈何したつて？」反響的に斯う受けて「俺は愛して居る。」

譯ひを欲する心は風ぎた。持病の弱點が斯うして發散した後は、我と自分の病を悲んだ。的もない怨恨に、一時精神が荒んでも、跡なくをさまつた。なくてならぬ女といふ強い命令の聲を聴くとともに、此の女を怨むことの非理を認めめた。此の點で彼ほど強く苦む人はなかつた。それはライフの奥底から涌いて來る苦みてあつた。彼は我が愛する女でなく、戀その物を悲まなければならぬ人であつた。彼の全身は不可抗な力に牽かれて、然に戀の方へ盲進して行つたが、その戀程悲痛なものは世の中になかつた。此の最大の不幸は、死ぬまで攘ひ得られないものになつて居た。

少時は沈吟するらしかつた。

「ぢや私貴郎を愛さないと思つて？」

「今はそれや愛してゐるだらうさ。だけでも明日となり、一月経ち、一年する内に、心から愛情が溢らずに居られるか、奈何か解つたものでない。今日だつてだ、斯うしてゐる此の瞬間にだつてだ、お前といふ者が悉皆俺の所有だといふ證據が奈何して立てられる？」

「お前の何分だけが俺の所有だといふのだ。」

「何も彼もだわ。」

「然うぢやない。全然然うぢやない。でなくともそれに近い方だ。殊に俺の欲しいと思ふ部分に限つて得られない。お前は赤の他人としか思へない。世間の人達同様、お前にはお前の世界がある。俺には闖入の出来ない世界だ。深い情の力で向つて見ても近づけない。感にしろ情操にしろ、思想にしろ、お前に就いて知る處といへば極く置かなものさ。言語なんて、不完全な符牒丈のものだ。靈は交通を容ささない。靈を展げて見せることは出来まい。情に堪へない恍惚の刹那でも二人は依然二人だ。毎も

それはそれや愛してゐるだらうさ。だけでも明日となり、一月経ち、一年する内に、心から愛情が溢らずに居られるか、奈何か解つたものでない。今日だつてだ、斯うしてゐる此の瞬間にだつてだ、お前といふ者が悉皆俺の所有だといふ證據が奈何して立てられる？

離れ離れな餘所餘所しい寂しい心の二人だ。その類に俺が接吻する。が、一皮下には俺に關係のない、別な思想が巢を造つてゐるのではないか。這箇が何か言へば過去を憶ひ出させる手懸りにはなるだらうが俺の戀は憶ひ出すまい。通りすがりの人がお前を眺めて通る。ともう心に一種の情が動くだらう。それも俺には看露せない。面と向つた時ですら前半生の思ひ出がさまざまに閃めくだらうけれど、一つも這箇には分らない。前半生——俺の不安は其處に在る。——斯うしてお前と一緒に居る。甘い幸福が身體中に溢れる。單にお前が居て呉れるといふ爲ばかりに幸福なことも時時はある。蝶々たり喋つたり、全てわが身を忘れてゐる。と、それが皆一時に、一種の考想で忽ち冷く化つて了ふ。其處へ氣が附かずに、昔の感覺の哀れな骸骨——過去つた遠い日の哀愁——をお前につけて憶ひ出すやうにしたら奈何だ。その苦みと言つたら實にない。お前との間に甚麼結ぶ附があるか知らないが、それを幻影にして見せる此の熱情も忽ち消えて

了ふ。お前は竊然遁げて了つて、近づかうとしても近づけない。迹には俺一人悄乎と凄惨じい曠野に取残される。一年二年の馴染も零だ。俺への戀が始まる前と今日とて、赤の他人に何の異りもない。そして俺はもう蝶えもしず口も利かないで、自分の立ち場に閉籠る。外面的な矯飾は一切見せまいとする。お前の心の底には挽回の附かない前半生の間に溜つた残滓が澱んでゐる。それがごく厚かな波動にも揺られて浮き上つて來はしないかと戰戰する。すると其處に長い長い沈黙が續く。沈黙の裏は煩悶だ。だから心のエネルギーは徒爾に、悲惨に費されて了ふ。「何を考へてるんだ。」斯う俺が訊く。お前も「貴郎何考へて？」と問ひ返す。俺にはお前の量見が解らず、お前には俺の量見が解らない。一刻一刻に互の隔たりは擴がつて行つて終には淵が出来る。」

「でも——。」イッポリイタは留めた。「私には那樣經驗無いわ。今までよりも、もつとずつと深く貴郎に獻げてるのですもの。私の方が戀が強いと思ふわ。」

女の方が戀が強い。それを聽かされた半病人は、復た傷を受けた。

「貴郎は考へ過ぎるんだわ。御自分の思ふ事を庇ひ過ぎるわ。貴郎の思想と私とを比べたらそれは「思想」の方へ牽かされても御無理とは思はないの。「思想」は始終變化して新らしくなつて行くけれど、私からは別に新らしい物と言つてお目に掛ける譯に行かないんだもの。でも最初の頃は貴郎も那樣でなかつたわね。もつと自然だつたわ。餘り生の苦みに注意を向ける風でもなく、議論など滅多になさりはしないで、接吻の方が盛んだつたわ。貴郎被仰つたてせう「言語」なんて不完全な符牒だけのものだつて。それならそのお積りて居らつしやいな。貴郎のは餘り亂暴だと思ふわ。」

暫時無言で居た。男の言葉に懲られて、心の中を見せなければならぬ氣につい成つて、

「死體にならなければ解剖は出來ないことよ。」

斯う言ひは言つたがすぐ述てはつと思つた。粗暴を悔いた。女らしくない、暗誣めいた話だと顧みられた。先刻物優しい調子で男を動かしたのが、形無しになつたと思つた。堪へ性の強い、情深い看護婦て居ようといふ覺悟を、又しても取り外した。

「然うてせう。私を壊すのは貴郎ぢやなくつて。」悔恨の心持で言つた。幽かな微笑が男に浮んだ。斯うした物争ひは、唯戀に傷つけるばかりのものといふことは二人に解つて居た。

司教の馬車が復た尾の長い二頭の驥の速歩に牽かれて通つた。黄昏の霧は、周圍の空氣を次第に薄青くして見せた。樹木は妖怪の姿に眺められる。バラチノや、グチカアノの頂に、鉛色の雲が冠さつて來た。硫黄のやうな一條の光線が尖つたチブレッソの梢に隔てられたマリオの丘へ眞直な劍のやうになつて觸れてゐた。

「依然俺に戀してゐるのか知ら。」ジェルジオは自分で自分に問うた。「女が

鳥の口  
はなす

すぐ急ぎ込んで來るのは何爲だらう。俺の言ふ事が眞實だと感ずるからだらう。少くも眞實に近寄つて行くからだらう。急ぎ込むのが一種の徴候だ。だが然ういふ自分も初中終鈍く苛々してゐるではないか。が此の原因は明瞭だ。自分は嫉妬深いんだ。何を嫉妬する？ 凡てが可妬しい

— 女の眼に映る物は何が何でも…。」

眼を女の方に呉れた。「今日は莫迦に美しい顔をしてる。色も蒼い。沈んだ痛痛しい様子を見せて居て呉れば俺は嬉しいんだ。顔が晴晴しくなり出すと、既う別な女のやうな氣がする。笑ひさざめく聲を聴くと、言ふに言はれない敵意が萌す、忿怒が涌く極まつて然うと言ふでもないが。」

種々の思想は黄昏の蔭に消えて行つた。偶と氣が附くと夕暮の姿は、戀女に就いてさまざまな事を思ひ出させた。蒼味を帯びた暗い女の顔の下から、ほんのりとギオレットがかつた色が透けて閃めいた。頸に捲いた細い鶏卵色のリボンの隙から、鳶色の愛嬌黒子が二つ覗いてゐる。

「どうも美しい。顔の表情が毎も深い。情熱的だ。彼處にチャームの秘密がある。此の女の美に飽きるといふことを知らない。何時見ても新しい夢を誘はれる。此の「美」は何と何から成立つてゐるだらう。言説に絶する譯だ。物質的には大した美人でもなし、奈何かすると眺めてる中にイルウジーンが消えて行く事すらある。はつと驚くことがある。それは形態的に観るから然うなんだ。靈の發現で淨化されないからだ。だけでも氣高い美人の三要件が見ん事具はつてゐる。額、口。其處だ氣高いのは。」

女の笑ひさざめいた事が偶と浮んだ。

「昨日何とか言つたつけ。何でも彼女が姉に遇ひにミラノへ行つた時の滑稽談だつた。轉げ廻つて笑つた」つて言つた。すると俺と別れて居ても笑つて居られるのだ。上機嫌で居られると見える。その癖來る手紙も來る手紙も、必と悲哀と涙と絶望で満たされてゐる。」

い事件を認めたといふ風に、躁急しい心が熬れ立つた。感情的に誇大した尋常の現象が、いろいゝの聯想と結び附いて現はれて來た。單に笑つたといふことが、妄想で膨らまされた。ミラノに居た間は、毎日毎刻歡樂に浸り切つて居たものと思へて來た。自分の知らない人達、義兄の夥伴等と俗つぽい、はしやいだ生活をしてゐたのだ。その周圍には、間拔けた顔の嘆美者が取圍んでゐたのだ。情ないやうな手紙は皆嘘だ。「這麼堪へられない生活つてありませんわ。お友達は掛つて私を疲らせに來るやうなものです。安静な時間てまるつきりないの。ミラノ人の情の深いことは、貴郎も御存知ね……。」這麼手紙の文句まで憶ひ出された。書記、辯護士、商人、那樣人々のイ、ポリイタを取巻いた圖が、想像に浮き出して來た。彼女は誰彼なしに笑を與れてやる。誰彼なしに手を握らせる。持前の水準を降げて氣の利かない談話を取り交してゐる。

男と離れて居る時の生活、自分の眼の及ばない世界、それを思ふにつけて、

二年間も堪へ堪へした不幸の重量が、づしんと一時に胸の上へ來た。「何を爲てゐるだらう。誰を見てゐるだらう。誰と話してゐるだらう。那の女が或る男のライフの一部分に成つてゐるとすれば、其の男に訪ねて來られた時には、甚麼所作をして見せるだらう。」幾度でも起る疑問だが、要するに解けない問題だ。

彼は又考へ惱んだ。

「然うした男等は、手ん手に女から或る物を奪つて行く。取りも直さず俺から奪つて行くやうなものだ。那樣男が甚麼影響を與へてゐるか。甚麼感情思想を嘘き込むか。イ、ポリイタの姿は誘惑的に出來てゐる。男を惱殺した結果は、情の興奮を喚び起さずには居ない性だ。可厭な奴等に必と迫られたに違ひない。欲情の色は顔に出来るものだ。顔は隠せない。すれば女は自分を思つて居る男の顔を見ない譯には行かない。可好しい眼附で見られてゐると思つた時の女の心持は甚麼だらう。イ、ポリイタだつて依

様關せずには濟まされまい。不安の情が起るに極まつてゐる。一種の情緒だ。縦し可厭と思つても情は情だ。だから誰でも女、顔を合せれば、既う俺を愛する女を惱亂させてゐるのだ。して見ると、俺がわが所有にしてゐるといふ實が何處に在る。」

た。

「俺はイ、ポリイタが戀しい。戀しいと思ふ心は、バッションだ。人間の愛情が何時か消えるものと知らなかつたら、自分のバッションは不滅な物といふ氣て居たらうと思ふ。イ、ポリイタが戀しい。此の女が與へてくれるやうな充足した歡樂が外で得られようとも思へない。とは言へ、一度ならず自分も瞥と通りすがりの女を見て情の發作を経験した。人知れず輝かしい女の眼に撃たれて、悒鬱な氣分に沈んだ覺えもある。客間で見知つた女、友人の戀女、それらの女に就いて空想して見たこともある——甚麼戀をして居る

のだらう。何から歡樂を求めらう——と。そして其の女の面影が暫時は心に往來する。他の考想を逐ひ出すでもなく、偶に出て來ては執念く附纏はる。然うした妄想は、イッポリイタを抱いてゐる最中にすら浮んで來る。それだもの、彼女だつて道行く男を見て情に擒はれないといへば嘘だ。女の心が俺に讀めて、那樣欲情の蔓延つてゐることが、ほんのちらつとでも分つたら、汚點だらけな女といふことが、確かに認められるに違ひない。して自分は物狂はしさに死ぬことと思ふ。ところが此の生きた證據は掴めない。女の心は眼で見られない。觸つて見ることも出來ない。と言つて瀆れて行く心は、依然瀆れずに居ない。肉體よりは餘計にその傾きが強い。併し推理は當にならないこともない。だらうと思ふことは確實だ。必と今晩近に受けた汚點に氣が附いて居るだらう。物思ひの裏に、その汚點が擴がつて來るのを注意してゐるのだらう。」

苦痛が昂じて猛然と飛び立つた。

「奈何なすつたの。何考へて？」イッポリイタが柔かに訊く。

「お前のことさ。」

「善く？ 悪く？」

「悪く。」

女は吐息を洩らした。一寸間を置いて、「未だ行らつしやらない？」

「うむ。行かう。」

起ち上つた。二人は舊來た道へと引返して行つた。緩く涙含んだ調子でイッポリイタが、

「何てなさけ無い晩でせうねえ。」

此の一日中に散り翻れた種々な悲哀を喚び返して、もう一度味ひ直すと、言ふ風に女は立ち停つた。日の暮れ果てるまでにはもう間もない。四下を見廻せばピンチオオも荒び果てた。沈黙が深い。紫色の影に包まれて、臺石に据ゑられた幾つかの半身像は、墓碑の列のやうに見られた。下の方の



市街は一面に灰が翳つてゐた。雨はばらばら落ちてゐた。

『今夜何處へ行きませう。是から奈何するの。』

氣落ちのしたやうに、『奈何しよう。俺にも分らなう。』

男女は途方に暮れながら、緊と寄り添つて立ち盡した。残念な慄はれるやうな苦悶が、彼等を待つてゐる。それと思つて怕れない譯に行かなかつた。夜の物思ひ、その間に守護無き二人の靈は、さざさざに引裂かれねばならなかつた。

『貴郎さへお厭てなければ、今晚私一緒でも可いの。』臆病らしく女が言ひ出た。

男は何爲とも知らぬ、可憤しい心に満たされてゐる。邪慳に刺々しく當らう當らうとする氣が衝上げて來てゐる。

『それにや及ばない!』

と言ひ放つたが、心の中は然うてなかつた。『今夜別になる?』駄目だ。

那樣事は出來やしない。』盲目な、残酷な反抗はあつても、絶待に不可能といふことが解つて見ると、内の方からびりびりと身震ひが出て來た。斯うした力強いバッシンに支配されると思ふ矜誇から來る一種の身震ひであつた。自分で繰返して言つた。『今夜此女と離れて居るといふことは出來る筈ぢやなかつた。逆も逆も。』不可知な一種の力に取壓へられて居ると思ふ感じは何とも形容の出來ないやうなものであつた。彼の心の周圍を、悲壯な呼吸が吹いて通つた。

『貴郎!』憎えたやうにイッポリイタが叫んで、男の腕に緊弱いた。

彼は駭とした。自殺者の残した血痕を見るために、先刻二人の佇立つた場所が眼に這入つた。

『可怕いか。』

『ええ。』未だ腕を放さなう。

それを彼は振り解いた。又胸壁の處へ行つて凭掛つた。既う闇は街の

上に落ちた。けれど今の先の映像が心の眼に残つてゐるから、磊石の上の黒い斑點は、今でも自分には克く鑿別が附く積りて居た。深くなり行く黄昏は、死骸に成つた幻の人影を思はせた。血を浴びた若いブロードの男の取り留められない姿が其處へ出た。「誰だらう此の男は。何爲自殺したらう。」ジョルジオは此の幻影に自分の姿を見出した。聯絡のない種々な思想が目眩しく頭腦の中を通つた。父の弟で、尙且自殺して果てたデメトリオの哀れな死顔が、電光に照らし出されたやうに眼に這入つた——白色の枕に黒布を掛けた顔。華奢で蒼白いとは言へ、男らしい手。聖水を入れた銀の小鉢、それは三條の鎖で壁から吊下げてあつた。鎖は風に揺られて、ちりんちりんと音を立てた。「この儘俺が此處から身を投げたら奈何だ。一足外せば眞逆様に……。墜ちて行く間は意識は無いものか知ら。」石に衝突つた時の震動を想つて見た。どうつと顛へた。手足の尖まで烈しい苦しい反撥の感じが擴がつた。異様な懈怠いやうな情も混じた。想像の中に、近

づく夜の享樂も出て來た——次第次第に酩酊の状態に落ちて行つて、……眼が覺めた時には、睡眠中何故とも知らず蓄へられた柔かい心持に堪能する程になつて、……と妄想や物思ひが、それからそれへと非常な速さで續き續きした。

背後を顧眄ると、イッポリイタの視線と憂然と撞突つた。盱然と睜いた眼が凝と這箇へ向いて居る。その眼の底に、自分の苦痛を増すものが潜れて居ることが分るやうな氣がした。毎もの癖の惚々とした身振で、イッポリイタの腕に自分の腕を通した。それを女は我が胸の處へ持つて行つて、緊乎壓附けた。抱締めて一つに溶合つて了ひたい。然うした望みが不意に我を忘れた二人の間に起つた。

「門が鎖ります。門が鎖りますよう！」

番人の嘯鳴る聲が沈黙を破つて、木立の奥で訶誓した。

「門が鎖りますよ。」

嗚鳴つた後は沈黙が餘計重く、陰氣になつた。形を見せない人達の口から、斯う喚かれたので二人は堪らぬ程身に應へた。聞えてゐる、今出る所だ、然う言つた風に足を張つて歩いた。でも依然寥れた小徑の其處此處で、呼び聲は煩く跟けて来る。

「門が鎖りますよ。」

「忌々しいわね。」イッポリイタが焦躁さうに癢に觸るといふ風に、斯う竹篋返をしてすたすたと急いだ。

トリニイタ・デ・モンチの大時計が、ア・エ・マリアを打出した。羅馬が見えた。大地に降り重なつた幅廣い灰色の異形な雲のやうに見えた。既う其處等の家々には燈が這入つた。窓から透ける火の光は、霧に滲けて大きく映つた。尙だ雨はばらばら落ちて居た。

「今夜来て呉れるか。ええ？」 ジョルジオが訊いた。

「ええ、行つてよ。」

「早く？」

「十一時頃。」

「來なかつたら死んぢまふよ。」

「必と行くわ。」

眼と眼が出遇つた。蕩けるやうな約束が交された。

情に打負けたジョルジオは、

「勘辨してくれ。よ。」

もう一度眼を見交した。それは蝶をやるやうな眼附であつた。

ごく低い聲で、

「待つてゐるぜ。」

「さよなら。」溫柔しく冠せて、「十一時まで。必とね。」

「さよなら。」

グレゴリアナ街の終端で二人は別れた。女は、カボ・レ・カアセ街を降りて

行つた。濕つぽい整石をとぼとぼ踏んで行く。後影は舗の窓光で判然見られた。それが隠れて了ふまで、ジョルジョの視線は跡を追つた。

「さあこれだ。到頭行つて了つた。甚麼家へ行くか解らない。其家に何事があつても解らない。折角被せて遣つた心靈の衣を脱いで、俗つぽい世界に首を突込む。其の時は既う別の女だ。通り一遍の女だ。俺には何も解らない。ごたごたした生活に逐はれて縛られて汚されて……。」

井オレットの匂が、ぢき傍の植木屋の舗から傳はつて來た。彼の胸は亂れた妄想で脹んだ。「現實と夢は何爲一致するやうに出來てゐないのだらう。吾儕は永久に自分自分の生活だけ追つて行つて可ささうなものだが。」

二

朝の十時に尙だジョルジョはいぎたなくすうすうと寢込んで居た。歡樂の夜の後に、年若な人達の貪る睡眠がそれだ。そこへ召使が起しに這入つて來た。

牀の上でくるりと向返つて、不機嫌さうに呶鳴り附けた。

「誰が來ても不在で可い。起しに來るな！」

と隣の室で煩い客の聲がする。物を頼むといふ調子で自分を呼んでゐる。

「ジョルジオ君、失敬。君に談話があつて来たんだが。」  
それはアルフォンソ・エキジリの聲であつた。それが一倍面倒臭かつた。エキジリといふ男は、同窓の友人であつた。餘り物の出来ない方で、賭博と遊蕩に持崩した揚句、居候的山師のやうな事をやつてゐた。不身持が顔に出て荒んで見えるけれど、尙且瀟洒な青年とは解れる。でも容貌や舉止には有繫に小才一つて世を渡るまでに落魄れた人間に見るやうな奸猾い下卑た風があつた。

其の男が這入つて来た。召使が引退るのを待つて始めて困つたといふ様子をして見せた。半分言葉を嚙込むやうにして言ひ出した。

「ねえ君。又かと思はれるか知らないが、實は君の好意に浴したくて来たんだ。少々賭博の方の借金が出来てね。お助けが願ひたいな譯で。匯かなんだ——三百リラばかり。是非何卒ね。」

「何だ賭博の借金だ？」斯うして言ひたい儘な侮辱を浴せ掛けた。喰入

られた蟻との關係を斷切つても得たはない彼は、一時凌ぎに棒の尖て刎除けるやうに唯大口を利いてゐるより爲方はなかつた。「驚くぢやないか。」エキジリはにやりと笑つた。

「まあ自然う言はないで。」猫撫聲を作つて泣附いた。「三百だけ貸して呉れ給へな。ねえ。明日必と返済するから名譽に掛けても。」

は、は、は、とジョルジオは高笑ひした。ペルを引いて召使を呼んだ。男が這入つて来た。

「その椅子の上の著物に鍵が這入つてるから出して呉れ。」

鍵が見附かつた。

「二番目の抽斗を開けて大きな紙入を寄越しな。」

召使は吩咐つた通りにした。

「可し可し。もう去つて可し。」

「四百といふ譯には行くまいかね。」召使が退つて了ふと、エキジリが極り

悪々、極端的な微笑を見せて斯う云つた。

「不可い。——ほら、三百リラ。もう是つ限だよ。匆匆と歸り給へ。」

直に手へ渡さずに、寢牀の端へ置いた。片方は莞爾手に取つて衣兜へ捻込んだ。曖昧な當てこすりと追従を交ぜたやうな調子で、

「何てつても豪いもんだ。」

部屋の隅隅をじろじろ窺つて、

「氣持のいい寢室だねえ。」

無圖と倚子に臂を落して酒を注いだ。貰入も詰替へた。

「此の節は誰が情婦だい。何て名だ。去年のとは物は別だらうね。」

「ちい歸らないか。眠るんだよ。」

「素敵な女ぢやないか。那の眼と来ちや羅馬に無い。……何處かへ行つたね。四五日遇はないや。羅馬ぢやあるまい。姉が確かミラノに居た筈だ。」

又注いで咽と一息に呷つた。酒の空くなるまで、時間を引張る氣で斯う

して出たらめな口を動かして居るらしかつた。

「亭主とは離れたつて言ふぢやないか。工面が良くなささうなものだのに奈何して如彼美服が著てゐられるだらう。曩日バブキノの通で遇つたが、既う二月にもなるかな。君の後釜は誰だか見當が附いてるか。モンチと言つて……いや君は知らない筈だ。その男はカムバニアの牙商でね、それは汚陋い頭髪のだぶだぶと胴體の大きな野郎だよ。僕がバブキノで遇つた時なども、其の野郎が君てくくと女の臂つぺたへ膠り著いて行くぢやないか。男が女に附著いて行けや一目見て知れらね。……那て金は有る。」

後の方は可嫉しい物欲し氣な可厭な可異な調子であつた。又そうつと三杯目を仰飲けた。

「寢たかい。ジョルジオ君。」

寢入つた體を伴つて返辭しなかつた。エキジリの言ふ事は残らず聴い

た。若しか裏服の上から動悸を見透かされはせぬか、それだけ氣遣はれた。

『ジョルジオ君。』

故と驚かされたといふ風に跳起きて、

『何だ！ 尙だ居たのか。何をぐづぐづしてゐるんだ。』

『いいよ、今行くから……。』寢臺へ近寄つたと思つたら、『おや、鼈甲の簀が  
……』

彼は絨毯の上に落ちてゐた簀を拾つた。稀しさうに捻つて見て、敷布の上  
に載せた。

『旨く遣つてるぜ。』此の聲も皮肉であつた。『それぢやああばよ。どうも  
有難う。』

斯う言つて手を出したが、ジョルジオは床被の下に引込めたまま出さなかつた。  
饒舌家は扉の方へ向いた。

『コニツクは飛切りだね。もう一杯御馳走に成らう。』

又呷つてそれから出掛けた。ジョルジオは牀の中で身にしめて毒汁を味  
ひ味ひした。

第二回目の記念日は四月の二日に當つた。

「今度の祝賀は羅馬の外でしませうね。」イッポリイタが斯う言つた。「戀の大祭日なんだから何處でもいいから二人限で祝はなくつちや……併し羅馬でない處でね。」

ジ・ルジオが訊く。

「去年第一回の記念祭のことを記して居るか。」

「記してますわ……。」

三

「日曜日だつたつけな復活祭の……。」

「私朝の十時頃に貴郎のところへ來たてせう……。」

「その時お前小さな英吉利風のジャケットを着て居たね、佳かつたぜ。祈禱文の書を提げて……。」

「その朝彌撒に出るのも忘れて……。」

「莫迦に急いでたぢやないか。」

「私飛ぶやうにして那家を出ましたわ。お祭の日は一分でも自分の時間のなかつたこと貴郎知つてらしつてね。でも奈何にか斯うにかお晝まで御一緒に居られたわね。その朝は御飯の時からお客だつたのよ。」

「午後は到頭顔も合さず終ひだつた。無情い記念日もあつたもんだ……。」

「まつたくだわ。」

「那の日は奈何だ。」

「貴郎の室は花の林のやうにね……。」



「俺も那の朝ちよつと出掛けて、ピアッツァ・デ・スバニア(花の市場)を買切つて了つた。」

「貴郎は薔薇の葉を幾掴みも私にお撒きなすつたわね。頸筋から袖の下まで、幾片となく投り込んでさ。」

「然うだ然うだ。」

「宿へ歸つて著物を脱ぐと皆紛々と翻れ出すぢやありませんか……。」

婿と女は笑つた。

「歸るとあなた帽子や著物の襷に附着いてたのが見附かつちやつたんですもの。」

「ふむ。その話は聞いた。」

「その日は其限外へ出なかつたの。出掛ける氣になれなかつたのですもの。考へて考へ抜いたの……眞箇よ。無情い記念日だつたわ。」

一寸沈んでまた女は、

「二回目の記念日が来ようといふことは、貴郎には初めから分つて？」

「俺？ いんにや。」

「私だつて。」

「終局の知れてるやうな戀が何だ。」とジェルジオは心に思つた。それからイッポリイタの先夫のことを考へて見たがそれには嫉妬は起らなかつた。

寧ろ闊い心で同情するといふ心持であつた。「今は立派に離縁された女だ。それに奈何して斯う不安が募るだらう。反つて亭主が在つて呉れた方が保障に成つて可いに。夫が在れば番人の格で、凡ての危険から女を警衛して貰へる譯だのに……と言つた處で、それも幻影かも知れない。夫が有れば有るで又氣が揉める。氣は揉めても今の痛みよりは優しかも知れない。」自分の考想ばかりを追掛けて、イッポリイタに耳は貸して居なかつた。

「ねえ貴郎。おや何處へ行きませう。何處か見立てなくちやならないわ。明日は四月の一日ですよ。私お母さんに既う然言つて遣つたわ。——此の

頃、毎もの通りちよつと旅行をして來ますからつて。出掛けるなら出掛けるで、お母さんへ其の積りにしなければならぬ。いいえ心配しなくつても可いの。立派に託辭があるから。まあ私に任しといて頂戴な。」  
快活に話して笑み傾けた。其の輝かしい微笑は、自分に任して置けと言ふと同時に閃いた。其處に一種の満足が見られた。——或る虚構を企む時に、孰の女も感ずる本能的の満足がそれだ。無造作に母を騙し果せるといふことが、ゾルジョを可忌な氣にさせた。又しても「夫の警護」といふことが思ひ出される。——幾らか惜しいやうな氣もせぬてはない。「此の自由のため、反つて這度苦悶をする譯が解らない。自由は歡樂の條件だと思つたのは誤りだ。偏見と疑惑、これがために正しく女を觀ることが出來ないが、この二つを除くには奈何すれば可いといふのだらう。イッポリイタを愛するといふことが、反つて侮辱する譯になつて居る。自分が愛してゐるために不貞腐れな女に見える。」

「餘り遠くつちや可厭ですよ。」女が言ふ。「何處か閑靜な佳い處貴郎知つてゐてせう。斯う奥の方へ引込んだ樹木でも茂つたやうな……チブリでもなし、フラスカアチでもなし。」

「『ベデカア』を閱るがいい。——其處のテーブルに載つてゐる。」

「貴郎も一緒に閱て頂戴な。」

女は赤表紙を持つて來て、男の掛けて居る長椅子の傍へ附着いて蹲んだ。可愛らしい仇氣ないやうな嬌態をしいしいページを翻つた。間を置いては二三行づつ低聲で讀んだ。

男は女から眼を離さない。惚惚するやうな襟足の美しさ。其處から艶艶と黒い捲毛が渦のやうに纏附いて頭の頂邊へ撫て上げられてゐる。二つの小さい褐色の愛嬌黒子も見えた。純白の天鵝絨のやうな領首へ、雙女宮の形に二つ駢んで、言ひ知らぬ魅力を添へた。偶と氣が附くと耳環が無い。成る程此の二三日毎ものサファヤの耳環が見えなかつた。金に困つて奈何

かして了つたのだらう。他は知らないけれど、苦しい日々の生活に種々な心遣ひを噛締めて居ることだらう。『氣紛れに往來する例の考想を捉へて、荒んだ心に思ひ返して見ない譯に行かなかつた。それは斯ういふ事で——若し女が俺に飽きたら、それも然う長くはあるまいが、樂な生活を餌にして近づいて來る男の所有に成つて了ふだらう。してその男は肉の代償に女を不自由から救ふに違ひない。その男はエキジリの言つたやうな、牙商でも何でも構はない。些々たる不幸を厭ふと同時に、別な嫌氣に打克つことが出来るだらう。ちやんと跋を合はして行くだらう。ひよつとすると嫌氣と闘ふ必要すら無くて済むかも知れない。』

友達の情婦にアルベルチニ伯夫人といふのがある。夫に離縁されて自由になつたは可かつたが、手と足で出されて了つた。それから一步一步にだらけて行つて、到頭高等淫賣にまで墮ちた。それでも世間體は巧く糊塗して行けた。尙だ外にも彼の懸念するやうな道を行つた女の著しい例が

あつた。奥底の知れない未來から來たやうなこの不安に確と撞突つた彼は、言ひ知らぬ痛みを感じた。此の不安と永久の闘ひを續けることを想つた。彼は、高い處から落ちて行く女を、早晩目の當りに視せられる運命になつてゐた。斯うした失墜は、ライフの何處にてもある。

『何處も佳い處つてないわ。』萎頓した聲で女が言ふ。『グッピオ、ナルニ、ギテ  
ルボオ、オルギエトオ……ほらこゝにオルギエトオの圖が——聖彼得、聖保  
羅、耶穌、聖ベルナルデイノ、聖ルドギコ、聖ドメニコ、聖フランチェスコ、セルギ、チ、  
マリア……。』

彼女は斯う節を附けて讀み立てた。丁度連禱を誦へるかのやうに聞えた。と頓狂な笑ひ聲をして首を反らし、美しい額を戀人の唇の處へ持つて行つた。處女を想はせるやうな、不斷の寛闊な心持になつて居たのであつた。

『まあ寺が澤山ですことね。必と異つた處よ。貴郎オルギエトオにし

て？」

ジョルジオは不意に爽々した香水を魂の上に漑ぎ掛けられたやうな感じがした。然うした言ひ知らぬ心持を感謝とともに味ひ味ひした。そしてイッポリイタの額に吻を接けた時に、其のグェルフォの市の追憶を辿つた。それは驚くやうな大會堂を無言で禮讚してゐるやうな廢都であつた。

「オルギエトオ！ お前行つたことがない？ まあ——其處の凝灰岩の岩の頂邊に立つて見たとするかね。——慵いやうな谿が眼の下に廣がる。寂とした人子一人居ないやうな市さ。窓なども閉切つたままだし、路次といふ路次は草茫々といふ奴だ。廣小路を通つて行くのがカプチノオの修道僧。慈惠院の表に黒い馬車を停めて、蹴込みに居るよぼよぼの僕を連れて降り掛けてゐるのが司教様だ。白つばい雨催ひの空へ尖塔が兀と出てゐる。大時計が緩い音で時間を打つ。偶と或る街の端に、奇蹟めいた大會堂が……。」

「幽靜なんだわね。」イッポリイタは寂しい都の像を夢に見るといふ風で、斯う呟いた。

「俺の行つたのは二月——丁度今日のやうな天氣の日でね、ばらばらと來るかと思ふと、弱い日光が透けて見えたり。居たのはたつた一日限。惜しかつたさ。それから何だか思郷病に魅かれたやうな氣になつた。それは幽靜な處なんだからね。其の時は無論獨法師だ。「信仰の深い、妹のやうな戀人と、永い四月の月一ぱい、這麼處に住んで見たい。灰のやうな小雨の降る中にも、折々光線を漑ぎ掛けられては、柔かい氣分になつて、會堂に出入りしたり、その外構を廻つて歩いたり、修道院の庭へ薔薇を摘みに行つたり、姉妹の家へ行つてコンフエトオを貰つて來る。エトルリアの蓋てエステステス(銘酒)を飲む。戀に溺れ、睡眠を食つて——處女のやうに眞白い、ふうわりとした寢牀の上で——」這麼夢をその時は見て居たものだ。」

此の夢はイッポリイタに幸福を思はせた。媯と笑つて仇氣ない表情を見

せて

「私これて信仰家よ。ね。オルギエトオへ連れてつて下さいな。」  
ぐんぐん男の足に纏はり付いて、自分の手で其の両手を捉へた。歡喜は  
其の總身に衝上げた。近づきつつある安息、遊惰、淡い哀愁——その豫味を  
彼女は既う舐めて居た。

「もつと聴きたいこと。」

男は良久その額に唇を接けた。汚すに忍びないと言つた風の心持であ  
つた。その後は長いこと漂えるやうな眼で女を凝視めた。

「あんまり額が美しいから……。」軽く額へ氣味に男が言つた。

此の時のイッポリイタは彼の胸に宿る理想のイッポリイタと一致した。彼  
の眼には美しい優しい素直なそして高い氣品の詩味を呼吸するイッポリイ  
タが見えた。平生彼女に被せた讚辭の通り「端嚴微妙 (Gravis dum suavis)」であ  
つた。

「もつと聴きたいこと。」復た女が呟いた。

柔かな光線が露臺から流れて來た。間を空けて吹き戦ぐ軟風に窓の扉  
はかた／＼と鳴つた。雨の雫は聴き分けられない位の音で撲ちつけて來  
た。

四

「爲るだけの享樂は、既う想像で爲盡して了つたし、感覺なり感情の經驗し得る範圍で、異常な、ごくデリケートな物の味を味ひ盡したのだから、もう一度實際に繰返して見ようといふのは愚なこつた。オルネトオ行きは廢さう。」斯う言つて行く先を取替へることにした。アルバノといふことになつた。

ジョルジオは、アルバノは勿論、アリッチアもネミ湖も未だ知らなかつた。イ、ポリイタは子供の時分、死んだ伯母の家がアルバノに在つたので、連れられ

て行つたことがあつた。男には知らぬ土地といふ興味があり、女に取つては遠い昔の追憶であつた。「新しい美しい美の面影、それで戀が生き生きと淨められる譯に行かないだらうか。處女時代の記憶は、毎もフレッシュな、毎も慰されるやうな香の油を胸に瀝らすことにならないだらうか。」

いよいよ四月二日の正午の汽車で發つことにした。停車場へは時間通りに來て出會つた。羣集の眞中に彼等自身を見出した時は、ぞくぞくする程嬉しい氣持がした。

「見附かりはしなくつて。ねえてば。見附からない？」笑ひ掛けた顔の何處かにびくびくするやうな様子も見せて女が言つた。多くの人の視線が皆自分に集まつて來るやうに思へた。「發車まで餘程あるの？ 奈何しやう。戦々するわ。」

二人限で占領するやうな車室をと望んでゐたに、生憎三人の客と乗合はして萎頓して了つた。ジョルジオは其の内の男一人と女一人に會釋した。

「誰？」 イッポリイタはジョルジオの耳の處へ伸懸つて行つて斯う訊いた。  
「今に解る。」

その男女連の客をイッポリイタは不思議さうに視入つた。男は長い嚴め  
しい髭のある、闊い額の禿け上がった色つばい頭附の老人であつた。禿の  
真中に、大きい歪な臍の形をした深い凹處が出来てゐた。太い指で軟かい  
物を押し凹ましたやうに見える。女は波斯肩掛に裹まれて帽子の下から  
瘠せ悴れた神経質な顔を見せて居た。容貌にも服装にも何處となく英國  
式のブルウ・ストッキングに見るやうな特色的な處が見出された。けれども  
老年の男の濡んだ眼附には、不思議に生き生きとした色があつた。憧憬家に  
似た心の火に輝くと言つたやうな、那樣眼に見えた。その男が可愛い微笑  
を浮べてジョルジオの會釋に應へた。

イッポリイタは記憶を捲つて見た。何處でか遇つた事があつたか知ら。  
判然と記憶に浮べることが出来なかつたが、唯那の異様な男女が、自分の戀

の夢語りの何處かに粘り附いて居るといふ漠然した考だけはあつた。

「誰？ ええ？」 又囁いた。

「マアトレットさんと細君さ。辻占が吉いぜ。何處で遇つたか覚えてるか。」  
「奈何も思ひ出せないの。遇つたにや遇つたんですけどね。」

「四月の二日にベルシアナ街の會堂で遇つたぢやないか。初めてお前と  
相識になつた那の時さ。」

「然うよ然うよ！ ええ、覚えててよ。」

彼女の眼は輝いた。不思議な偶會と思はれた。更めて復た男女を眺め  
て一種の懷愛しい情に撃たれた。

「縁喜が吉いわね。」

甘い悲哀は彼女を包んだ。頭を背後に靠せて、もう一度過ぎた日の事を  
想つて見た。青い淡影に覆はれた神祕めいたベルシアナの小さな教會堂  
が、眼の前に出た。——露臺のやうな彎曲の附いた高座。合唱の少女達の花

把。階下には白い縦の説教壇、その前に絃楽器を持つて立つた演奏者の列。櫛の木の座席に就いた厩かな聴衆は、大抵胡麻鹽か禿頭の人達であつた。主任の拍子が始まつた。香とギョレットの敬虔な句とに混つて、セバステア・ン・バハの樂の音が聞えて來た。

追憶の快さに、ひたひたと男の方へ摺寄つて、忍び聲で、「貴郎も昔の事考へて？」

一々忘れて居ない。那の崇嚴な當時の光景を一部分でも忘れて居ないことを知らせる爲に、奈何かして自分の感情が男に通じたかつた。ジオルジオは人目を窺ひやうな眼附をして、外套の裏の下から女の手を探した。そして軽く握つた。二人の心は同時に身顫ひを感じた。戀の初めに知つた或る微細な感覺を思はせるやうな身顫ひであつた。斯うした態度が静と續いた。種々な事が考へられた。暖かさに、ぼつと上氣したやうな、昏睡しさうな心持になつた。平坦な汽車の震動に、何處までも慰されるやうな

氣分になつた。窓からは霧に浮き出した緑がかつた景色が折々眼に這入る。空には雲が驟つた。雨も落ちて居た。マアトレット君は隅の方で昏昏やつてゐる。細君は雑誌——「ライシアン」を読んでゐる。もう一人の客は目の上へ帽子を引冠つたまま高駈て居た。

「合唱組が拍子を外しても、マアトレット君の指揮は主任ほど確乎したものだつた。奈何かすると音楽に浮かされて老人といふ老人は、皆拍子を取り出した。空氣は香とギョレットで噎ぶやうになつて居た。」ジオルジオは快い心持になつて、記憶の動くままに、的も無く我を忘れさせて居る。「俺の戀の序曲としちや、是以上に異常な詩的なものは有りやうは無。何か斯う浪漫的な物語をても思ひ出して居るやうだ。——が實際これは俺の身に在つた事だ。此の追憶は斷片も残さず、毎もちやんと心の眼に留めてある。詩的に始まつた戀だから、後になつても戀の全體は一種の夢の色を帯びるやうになつた。」微かに痺れたやうな睡氣が差した。その中で、或る取留めも



ない幻影が揺めいた。それは彼の心の全面に、音楽的の魅惑を起させる因であつた。「香の粒に……小さなギョレットの花把……」

「まあ。マアトレットさんの熟く睡入つて居らつしやること。」イッポリイタが低聲で、「すやすやと嬰兒みたいね。」

微笑みながら斯う附足した。「貴郎もお睡い？ 雨は霽らないし——變に斯う慵くて、目睡の重つたるいこと。」

然う言つた眼は半眼に瞑ちて居て、長い睫の間から男を視た。

ジョルジオは斯う思つた。「那の睫に俺はすぐ屈つた。彼女が會堂の真中で、倚靠の高い腰掛に掛けて居ると、窓から流れ込む光線で横顔が分明と隈取られた。窓の外の雲が霽れると、光線が赫と明るくなつた。心もち體を揺ぶつたやうだつた。その機みに長い長い睫が判然俺の眼に映つた。」

「尙だ大分なの？」

銷魂しい汽關の響は、或る停車場の近いことを知らせた。

「アルバノを通過しちやつたやうよ。賭しませう。」

「なに、那様事はない。」

「いいわ。訊いて御覽なほ。」

「セニイ・バリアノオ！」斯うブラットフォムで嘔れた聲が叫んだ。

ジョルジオは愕いた形て首を突出して訊いた。「アルバノですか。」

「否え。セニイ・バリアノオですよ。」驛夫がにたにたと答へた。「アルバノへ被行つしやるんですか。それぢやチキイナてお降りになるのですか。」

イッポリイタはさやつきやつ笑ひ崩れた。マアトレット夫婦は吃驚した顔をして彼女を眺めた。懸てジョルジオも引入れられて笑ひ出した。

「奈何しませう。」

「とも斯く降りなくつちや。」

男は鞆を搬荷者に渡した。イッポリイタは尙だ笑つてゐる。——心から清しく笑つた。此の失錯を笑談に茶化す心持であつた。マアトレットは此の

青春の閃めきを驚くといふ風に見えた。老人にはそれが日光の波と思へた。そして彼はイッポリイタが淡い旅情を車室に残して降りて行く時に、早く頭を低げた。

汽車は荒涼な田舎道を復た滑り出した。それを見送つてイッポリイタが、半ば心から半ばは浮氣らしく、「マアトレットさんにも別れて了つた。殘惜しいわね。何時復たお目に掛かれるかと思ふと。」

斯う言つてジェルジオの方へ向返つて、

「奈何するの。」

驛員が案内してくれた。

「チエキイナ行きは四時三十分の上つて参ります。」

「丁度いいわ。」イッポリイタが続ける。「今二時半よ。是から私が引取つて案内して上げるから、貴郎は黙つて跟いて被來つしやい。さ、被來つしやいな、小僧さん。私に附着いて來るんですよ。紛らかしちや不可せんよ。」

這麼燥いだ、子供に言ふやうなことを言つた。楽しい心持は二人に溢れた。

「セニイつて何處だらう。バリアノオつて何處だらう。」

其の邊に村は見えなかつた。灰色の空の下には低い丘が、そこはかとな、い緑の色を展げた。路傍に一本結ばれて節の出來た立樹が、濕つばい空気に揺々してゐる。

雨が翻れてゐるので、二人の漂泊者は停車場の一室で息んだ。煖爐には火の氣も無い。壁にぼろぼろの古地圖が一枚懸つてゐる。其の面には黒い線が網のやうに引張つてある。這箇の壁には藥の廣告紙が吊つてゐる。會つて暖か味を知らない煖爐と向ひ合つて、油團の掛つた一脚の長椅子が一面に疵を受けて、麻屑の心も大方なくなりかかつて居た。

「おや。」「ベデカア」を讀んで居たイッポリイタが、「セニイにはガエタニイノ旅館てのがあるんですつて。」

此の案内は二人を笑はせた。  
「煙草でも喫ふかな。」ジョルジオが言つた。「今三時だ。丁度今時分だつた  
つけな、二年前に那の會堂へ這入つたのは。」

其の日の記憶が復た彼の心に出て來た。數分間は二人とも言葉は無し  
に煙草を喫した。耳を澄ますと、雨の音はだんだん強い。曇つた窓玻璃越  
しに那の脆弱い立樹が颯風に揉まれてたわわする態が見えた。

「初を言へば、俺の戀の方が餘程舊い。那の日より前に、既うそれがあつた  
んだ。」

女は遮つた。

男は其の回し難い日の魅力に深く吸込まれて、優しく言ひ續けた。「初め  
てお前が通つた時の姿が眼に見える。奈何して斯う印象が消えないんだ  
らう。丁度晩方燈火が點いて街々に瑠璃の波が立つ時分……獨りてアリ  
ナリーの窓の前に居た。凝と物影を視て居たけれど、判然鑑別が附かなか

つた。然うした時の心持つて、何とも言へなかつた——弛んだやうな無情  
いやうな、何だか知らないが、斯う物に撞れると言つた……。那の晩俺は、詩か、  
憧憬か、藝術か、靈か、何でも那樣物を無暗に掴みたいやうな氣がして居た。  
それがやつぱり前知らせだつたのかなあ。」

長い間を置いた。イッポリイタは物を言はない。對者の語り出すのを待  
受けた。二人の煙草から立つ淡い煙は、面帕に裹まれた記憶を更に更に面  
帕で裹むやうに見えた。その煙の中で男の話を聽くことは、イッポリイタに  
は不思議な愉快であつた。

「二月だつた。丁度同じ時分に、オルギエトオへ旅行をした。その時若し  
アリナリーの家に居たのだつたら、遺物匣の寫眞を其處で貰ふためだつた  
のだ。其處へお前が通り掛つた。其から二三度——それより多くはない  
——毎も同様に、不思議に蒼白い其の顔を見た。甚麼に蒼白かつたか、お前  
に想像は出來ない。俺だつて二つと見た事がない。斯う思つたさ。——那

の女奈何して立つて居られるだらう。脈管に血が通つて居ないに極まつてる。まづ人間の色ではなかつた。空から登石に降り蹴ぐ瑠璃の洪水を透して見ると、お前は正體の無い魔物としか見えなかつたからね。誰だか一緒に隨つてた男が有つたやうだが、那樣事には氣附きもしなかつた。お前の跡を跟けようとも思はなかつた。お前の方から一目だつて願ふられはしなかつた。尙だ記えてる事がある。少し行くと點燈夫に道を切られて、お前其處の處へ立縮んだらう。那の竿の尖に點けた火から火花の散るのが今でも見える。瓦斯の火がばつと點るとお前は光を浴せられたやうになつた。」

イッポリイタは薄ら悲しさうな微笑を見せた。女が舊く撮つた寫眞を眺めた時に、胸を壓されるやうな悲哀がそれであつた。

「然うてせう。蒼かつたわ。」女が言つた。「三月も患つて辛とその少し前に牀を揚げた處だつたの。もう死ぬつて處まで行つたのですもの。」

雨は激しく玻璃窓に吹附けて來た。例の立樹は何者かの手で根掘ぎにされるかのやうに、風に煽られてぐるぐる廻りをしながら、燃れたり焼んだりした。暫時二人は雨風の威力を凝視めた。裸體のやうに寥れた微塵も生氣の通はない田舎の田圃に、雨と風ばかりが丁度精靈有るもののやうな舉動を見せた。イッポリイタは可憐しい心に堪へられなくなつた。樹木の苦痛——此の想像は彼等にも眼の前に自分達の苦痛を思はせた。彼等は胸に這麼物を描いた——停車場の周圍は一面の曠野で、その中に慘憺な此の建物がある。その前を種々な旅人に乗せた列車が引切なしに通る。旅人は各自に區々な物思ひを懷いて行く——。先刻二人が楽しい眼で見て居たその同じ事柄から、物悲しい幻影が浮んで出て、それからそれへ移り移りした。その幻影も消え、心の壓迫も除れて我に還つた時には、二人の胸の底に、噓へ難い或る踏りの隠れて居ることが解つた。——挽回すことの出来ない昔の日を嘆く心とも謂へよう。

二人の戀の背後には長い過去があつた。死骸の一杯這入つた異體の知れない大きな網が、何年かその背後に引摺られて來た。

「奈何したの。」イッポリイタの斯う訊いた聲は幾らか變つて居た。

「奈何した。お前は。」疑と視詰めながら男も問返した。

那箇からも答はなかつた。無言の儘で、また窓から外を眺め直した。天地は可憐しい微笑を見せた。幽かな光が丘の上に閃いた。一時は金光が流れたが、ふつと消えた。又別の日光が輝いたやうだが、それも消えて行つた。

「イッポリイター・サン・チオ。」斯うジョルジオは女の姓名を緩乎言つて見た。其の發音のチアムを味ふといふ風であつた。「お前の名前が初めて分つた時は、甚麼に胸が鼓動したらう。其の名前の中で甚麼にさまざまな物を見たり感じたと思ふ？」イッポリイタといふのは死んだ妹と同じ名前だ。その綺麗な名前は俺には舊馴染なんだ。「ああ、萬望して此の自分の唇

に昔日の味が味はして遣りたいもんだ。」——直ぐその時こんな深い情が涌いた。其の日は朝から晩まで死んだ妹の事と神祕な夢とで、氣が怪しく紛糾つて了つた。——お前を探しに行きもしなかつた。——迷惑を掛けることは嫌ひだから、那樣事は自分で思ひ止つた。それだけ心の底では、口に出せない程の信用を置いてゐた。何時かしら俺を知つて、愛してくれる時が來るだらうと然う極めて居た。何て甘い感じがしたらう。俺は現實を離れて居た。音楽と書物と、それが精神の糧であつた。偶と或る時お前をジョヴンニズガムバアチの音樂會で見掛けた。がお前が樂堂を出ようとする時に一寸見たばかりだ。お前は瞥と俺の方を見た……。それから又別の時に俺を視返つたこともあつた。——覚えて居るだらう。それはバプキノの入口で、ピアアレ書店の前だつた。」

「覚えてよ。」

「誰だか女の子を連れて居たらう。」

「ええ。チュチリアつて、姪なの。」

「俺は傍へ避けたさ。と、お前はすつと通つた。其の時自分と同じ位な背  
恰好だといふことに氣附いた。曩ほども蒼くはなかつたね。瞬間の矜誇  
が、ぞつと總身を抜け通つた……。」

「克く那樣にも細かく。」

「記えてるか。三月の末頃だよ。だんだん氣が丈夫になつて行く。大き  
なパッションの起る日が近づいて来るやうな氣がして、その考の裡に日を送  
つた。二度ともお前がオレットの花把を持つてるのを見掛けたから、家中  
オレットで埋めた。那の初春が忘れられない。朝毎の軽いふわふわとし  
た寢心地。又夢路からうとうとと醒め返つて来る時の氣分つてない……。  
眼だけは光線と親みを作つて居ながら、精神は尙未練深く現實に還ること  
を躊躇つてゐる。ごく子供らしい事で、イルウジョンを起して憫となつたこ  
となどもある。五部合奏の音樂會へ、ベエトオエンのソナアタを聴きに行

つたら、崇大な情熱的の詞章が、間を置いては幾度も繰返されるに伴つて自  
分は胸の中で、お前の名が出る詩の句を繰返し繰返しして居ると、氣が妙に  
もだもだする程逆上させたことがある。

イッポリイタは笑つた。けれども、男の物語は、戀の初期にあつた聯想の方  
へ力を入れて話してゐることは言ふまでもないから、餘り快い心地はしな  
かつた。現在よりも其の時分の方が、楽しく思はれるのか知ら。遠い以前  
の追憶に優るものは無いのか知ら。

ジョルジオは尙續けた。「俗世間を蔑視む心は、到底世を離れたベルシアナ  
の會堂のやうに、幻想的な神祕的な隠れ家の夢を誘はれる氣になれなかつ  
た。ねえ、然らぬぢやないか。往來の方へ向いた石段の上の扉は鎖つて居た。  
多分年中鎖つて居るのだらう。皆横の方の路次から出這入りした。其處  
は小料理屋の赤い招牌が、大きなフラスカと一緒に居る處で、何でも酒  
の匂ひがひんひつとした。記えてゐるだらう。入口は堂後にあつた。這

入るには寶藏を抜けて行かなければならない。寶藏つてごく小さい坊さん一人、番人一人這入り難ねる程のものだ。其處がそれ「智慧の神殿」への入口なんだ。蟲喰んだ座席には、爺さん、媼さんがずらりと列んでゐる。アレ、サンドロ、ムミイは何處へ聴衆を招びに行つたのだらう。此の音楽に熱心な人達の集會で、お前が「美」を人格化して居たとは眞逆知らなかつたらう。那の「マアトレト」といふ人は此の節の最も堅い佛教學者だ。細君には「音樂原理」といふ著書がある。お前の側に坐つてた婦人は、マルグリイター・ラウベ・ポオルと言つて、死んだ良人の研究を纏め掛けて居る有名な女醫だ。長い緑の外套を着て、爪先で這入つて來た魔法使のやうな猶太人は、ドクトル・フライヘルといふ獨逸の醫者で、バハ狂と言はれて、ピアノの名人だ。十字架の下の處に腰掛けてた坊さんは、カストラカアネ伯と言ふ大植物學者。もう一人植物學者で、細菌學者を兼ねたクボオニといふ人が伯爵の前に居た。それから那の忘れられない瀧泊なてくてく肥つたヤコブ・モレシット

といふ老人、音響學でヘルムホルツの補助をやつたブラゼルナ、婆羅門に溺れたブレラフエリットのデイギスといふ畫家……其の外名は餘り聞えなくとも皆優れた人達の集りて、高い水準に立つ近代の科學者や、冷かな人生の傍觀者や、夢を讚美する情熱家などばかりであつた。」

ジョルジオは其の光景を描き出すといふ風に一寸口を嚙んだ。

「此の學者達は、殆ど宗教に對する敬虔の心で、音樂に聽入つた。默示を被るといふ風の態度もあれば、無意識に主任の身振を摹似てるものもあり、低音で合唱に隨つて唱つてるのもあつた。男女の合唱班は金の剝げかかつた演臺に陣取つた。若い娘たちは眼の高さに譜表を揚げて前列に立つ。一段下つてオロニスタたちの粗末なスタンドには、蠟燭が燃えてゐる。鈍黒い背景に黄金の星が輝くやうであつた。其處此處でその小さい焰が滑かな樂器の面に反射した。弓の尖にも光る珠が附着いたやうになつた。すぎすした禿頭の短い黒い髭を立てて、金縁眼鏡を懸けたアレクサンドロ、メ

ムミイが、嚴肅なしかつめらしい身振でオルケストラの前に立つて拍子を取つた。曲の関る度に、堂内にじはが起つた。制へ兼ねて居たやうな笑ひ聲がばらばらと譜本のペイジを捲る音に混つて高座から落ちて來た。空が明るくなると蠟燭の火は白く化した。以前禮拜行列に擔ぎ出された十字架が一つ、高い高い處に懸つて居る。黄金の橄欖と唐草で悉皆裝飾がしてある。それが溢れる光に壁から剝がれて見えた。聴衆の白い禿頭が幾つも櫛の倚靠の上から輝つて居た。すると不意に空模様が変わつて、薄霧の様な陰影が復た其處ら中へ這込んで來た。抹香か、安息香か、何か複雑な香氣が有りとも見えない波を打つて本堂一面に寄せて來た。悄乎立つた香壇の玻璃瓶に、褪せかかつたギョレットの花把が二つ、春の息吹は其處から出た。此の入れ混つて消えて行く薫香は、老人達の心に、音樂で誘はれた夢の詩のやうなものであつた。と、それと竝んだ、別な人達の心々には、又別な夢が展がつた——丁度解けかかる雪に照添ふ曙光のやうに。」

彼は樂し氣に此の光景を組立てて見た。詩的な、リリカルな氣息で再び煖めて見た。

「奈何も、不思議な有りさうも無い話ぢやないか。」斯う叫んで、「羅馬といふ知識で銜びついた都會の真中で、シオベンハウエルの哲學論の二冊も出した佛教學者の音樂家が、自分の享樂に神祕な聖堂を借りて、セバスタアン・バハの祈禱樂を演奏して喜んで居るといふのだ。聴衆の學者達も皆音樂狂で、自分の娘達に合唱させて居るといふのだ。とんとホフマンの書物に見る圖ぢやないか。どんより曇つたぼかぼかする春の日の午後、斯うした老學者達が皆人生の祕密に掘り當てる氣で、苦しい勞作を續けて居た研究室をすつと抜け出して、這處人里離れた禮拜堂へ集つて來て、お互同士の心を結び附ける嗜慾を満足させて、現實の肉體を離れた憧憬の生活に酔癡れようとして居るのだ。すると、此の人達の前で、佛學者の從妹と佛學者の友人との間に、微妙な牧歌が展げられて行く——氣取つて言へばだ。それか



ら祈禱樂も濟むと、その佛學者先生何事も御存じ無して聖なるイッポリイタ、サンチオといふ者に、未來の戀人を下渡さうと言ふのだ。」

彼は快く笑ひながら起上つて、「これで定式の記念演説も濟んだ。」

暫時はイッポリイタは恍然して居たが旋て、「それは復活前主日の前の土曜日でしたわね。」

女も起上りさま、ジョルジオの傍へ寄つて頬に接吻した。

「出掛けませう。既う雨は降つてないわ。」

外へ出た。濕つぽい霰石の上を逍遙すると、無理に制へられたやうな薄日が落ちて居た。冷たい風にぶるつと顫へた。眼の前に波打つやうな連山が青色に裏まれて、幾つも幾つも皺になつた處だけ光つてゐる。其處此處に大きな水潦があつた。綿雲の隙間に廣がる空の濃藍が影を水潦に投入した。例の小さい立樹がぼたぼた露の翻れるたびに、さらりさらりとした。

「那の小ぼけな樹が何時までも追憶に残るわね。」静と立つて眺め入つたさま、「ああ寂しい寂しい。」

鈴の音が列車の近いことを報らせた。四時十五分だ。驛員が切符をと言つて來た。

「アルバノへは何時頃着きます。」ジョルジオが訊いた。

「七時頃でせう。」

「夜だわね。」イッポリイタが口を入れた。

薄寒くなつて男の腕を捉へた。斯うした冷冷する晩力に見知らぬ宿屋へ這入る——赫赫と燃える燵の傍で差向ひに料理を喰べる——然う思つて女はぞくぞく嬉しがつた。

細かく顫へるのを見て、ジョルジオが、「室内へ這入らうか。」

「いいの。ほら、お日様出て來てよ。今に暖くなるわ。」

親みを深めたいといふ氣が強く彼女に起つて來た。男の側へ緊と引添

つて急に蝶を掛かると、聲音も容貌も、身振も——全身の隅隅までが誘惑で満ちて来た。可愛い男を、強い女性的な魅力で漂はさうとした。過ぎた日の幸福を曇らせる爲に、眼の前の幸福を見せ付けて、男を酔はせ眩かさうとした。以前よりも今の方が一層可愛く、氣高く、可憐しいやうに思はせようとした。偶と疑懼が彼女を襲つた——無慈悲な疑懼であつた。彼には久しい以前の女が惜まれて居るのでないだらうか。消え去つた享樂を歎いて居るのでないだらうか。那の時分だけが、恍惚の頂上だつたと思ひ込んで居るのでないだらうか。

彼女は斯う思つた。「那の男の線言を聴かされて、變に氣が減入つて了つた。涙を翻すまいと思つて甚麽にか骨を折つたらう。そして自分でも那の男は、腹の中で泣いて居るのだ。奈何して此の戀には、這麼重苦しい過去が引懸つてるのだらう。」

又斯うも思つた。「既う私が可忌になつたのか知ら。いや、然うとまでは

未だ思はないだらう。幻影が見て居たさに、御自分にも隠して居るのだ。でも今私から幸福を求めるとは、那の男には可難しい。今でも依然可愛くて居らつしやるにしても、唯それは可懐しい悲哀を喚び出す種ぐらゐにしきや思つて居ないんだ。ああ！私だつて然うだ。一緒に居て心から嬉しいと思つたやうな事は、滅多にない。同じやうに苦しい。それでも那の男が戀しい。苦しいのが又戀しい。奈何かして可喜しい氣にして進げたさが一杯だ。此の戀がなければ私の生活も無いのだ。二人とも戀し合つて、それで這麼に無情いといふ譯が解らなう。」

戀人の腕に重く取纏つて、その顔を凝視めた。彼女の眼には物思ひの影が差して、深い優しみの表情が動いた。

「二年前の丁度今頃、那の會堂を二人で一緒に出て来た。其の時は別に戀に關係のないやうな話をなすつた。がそのお聲は、唇で舐められたやうに心に觸れて、どきりとなつた。其の氣持を長い接吻と思つて嬉しがつて

居た。その折の顛へは、何とも言へない或る情が起つて、何時まで経つても底止がなかつた。眞箇に不思議な機會だつた……。今日は二回目の記念日——そして戀は依然續いてる。先刻も那いふ話だつたが、お聲が毎も自分を懲る調子と異つて聴かれたにしても、尙且胸の底を抉られるやうに思つた。私たちの前には、楽しい夜が待つてゐる。過ぎた日を惜むなんて何だらう。二人の自由と親密が、當時の不安と躊躇ほどの値もないとは！ 那程澤山な追憶がありながら、此の戀に取つて些とも新らしいチャームにはならない！ それで男が戀しい——全て我が身を棄てて掛つてゐる——男のデジールの前には、私は禮儀を知らない人だ。二年経つ間に大へんな感化を受けた。別な女に成つた。新らしい知覺と新らしい精靈と新らしい知識を授かつた。私は那の男に製られたやうなものだ。御自分の思想に酔はされると同じやうに、私にも酔はされて可いんだ。悉皆私は那の方の所有だ——何時まで経つても。」

情を帯びて強く自分の體を男に押附けた。

「貴郎嬉しくはなくつて？」

其の調子は男を動かした。彼は端なく生暖い氣息で包まれたやうに眞の幸福の身震ひを覺えた。

「嬉しいさ。」斯う答へた。

汽笛が聞えた時は、二つの心臓が同じやうに鼓動した。

希望通り乗合の一人もない車室に有り附いた。二人して一つ一つ窓を閉切つて了つた。車の動き出すのが待兼ねられた。互ひに腕を交した。

そして二年間の優しい心に言習はした種々の甘い呼び名を繰返した。

それから静かに竝んで坐つて、口と眼に何とない微笑を作つた。迅い血の循環が、次第次第に鎮まつて行くやうな感じがした。

窓の外には、單調な田舎の光景が衝と眞前に來たと思ふと、旋てギョレット色の霧の中へ消込んだ。



「此膝へお頭を載つけて横にてもおんななさいな。」  
彼は言ふ儘になつた。

女は、「風で、こら、這麼にお髭がごしやごしやに。」

と言つて指尖で男の口に掩冠さつた毛を掻分けた。その指尖を男は吸つた。女は手を男の頭髮に遣つて、

「貴郎も睫が大へん長くつて居らつしやるわ。」

睫を賞味するといふ風に女は男の兩眼を閉ぢた。額や額顚も弄つた。

もう一度指を一本々々唇の端へ持つて行つて吸はせた。女の頭は男の顔の眞上に來て居た。下から瞻上げると、女の唇はごく毫しづつ、じりじりと開いて行つて、そこから雪の様な齒が露れて來た。口を緘ぢては復たそろそろ開き掛ける——二枚の花瓣が眼にも留らない運動をして居るやうに

——その中からは皓い寶玉が閃めいた。  
斯うした笑戯の中に、二人は骨身の解弛れるやうな氣分になつた。何事

も打忘れて幸福を感じた。列車の單調な動搖に彼等は慰された。低い聲音で憧憬の言葉が交はされた。

嬉しさうに女が、

「二人連の旅行は初めてね。二人限の車室といふのもこれが初めね。」

二人には新らしい經驗だといふことを、彼女は繰返して悦んだ。

又しても閑靜な宿屋が彼女の心の眼に浮んだ。——古風な部屋——白い蚊蠅の中の大きな寢臺。

「此節の事ですから——」男の氣を紛らす積りて、「アルパノも客はありますまい。伽藍とした宿屋にたつた二人限つて洒落てるわね。みんな新夫婦だと思ひますよ。」

疎と寒氣がしたと思つたら、外套を引被つて、男の肩へ靠れ掛つた。

「寒いわねえ。著いたらだんだん火を燃して熱いお茶を戴くことよ。」

イッポリイタは頭を腰掛の倚靠に支持つて、黒闇に消えて行く、廣々とした單調な田圃の方へ眼を遣つて居た。

傍ではジョルジオが再び反逆的な妄想の領分へ墜ちて行つた。可怕的い幻像に彼は苛まれた。それと闘ふことは彼には出来なかつた。何爲と言つて、それは意志の力で絨ぢることの出来ない腫の無い精神の眼でそれを視て居たからだ。

『何考へて？』不安さうにイッポリイタが訊く。

『お前の事さ。』

彼は女の事を考へて居た——女の新婚旅行のこと——一般の新夫婦の舉動——『丁度今俺と斯うして居るやうに、自分の亭主と二人限で居たこともあつたんだ。女の悲哀を誘ふのは、然うした追憶があるからなんだらう。』

『可怖しい、可怖しい！』猛然と起上つた。それはイッポリイタも熱く見慣れて居る、苦しい病氣の發作の知らせであつた。彼女はその手を捉へて、

『苦しくつて？』

男は頷いた。女を眺めて樂しからぬ風ににやにや笑つた。が、女は問詰める程の元氣も出なかつた——苛辛い胸を裂くやうな返辭を聴くに堪へなかつたのだ。黙つて居る方が可いとは思ひながら、頼に接吻した——男の遣る瀬ない回想の縫れを解す積りて毎も爲慣れた、長い長い接吻であつた。

『さあ貴郎チキイナよ。』着車を知らせる汽笛を聴くと、氣輕に斯う叫んだ。

『迅くさ、貴郎。降りるんですよ。』

男の氣を引立てるために故と快活にして見せた。女は窓の戸を落して

外を見込んだ。

『寒いけど美しい晩よ。さあ貴郎！ 記念日ですよ。幸福でなくちや不可いことよ。』

女の強い優しい聲の響で、彼の陰翳は拂ひ除けられた。爽々とした空気に下り立つて見ると、すつとした気分になつた。

ダイヤモンドのやうに透徹つた大空は、水に潤つた曠野の上に、穹窿を被ひ冠せた。透明な空気の中には、未だ黄昏の残照がちかちかして居た。一つ又一つと星の出る有様は、目に見えない燭臺の枝の上で震へる火のやうであつた。

『幸福でなくちや不可いことよ。』然う言つたイッポリイタの言葉の響が胸の中から響けた。そして彼の精神は、垠も無い天啓を得たやうに膨らんだ。聖く嚴かな此の夜の幸福を添へる物としては、閑かな部屋と、暖い燗爐と、白い紗の中の寢臺とは、權衡の取れない程粗末な材料としか思へなかつた。

た。『記念日ですよ。幸福でなくちや不可いことよ。』——二年前の此の時間には、甚麽事を考へて居たらう。何をして居たらう。彼は、的もなしに街から街を彷徨つた。些とても寥れた處へと、本能の欲には誘はれながら、それでも自然と足は繁華な衢へ牽附けられた。彼の矜誇と歡喜は、その衢で俗世の生活と比べて見て、一層の強さを増した。都會の喧擾は、彼の耳に唯幽かな呻きとしか響いて來なかつた。

ルドギョトオニは古い旅館であつた。模造大理石のやうに塗つた長い玄關側の漆喰壁。由緒ありさうな石で飾つた緑色の扉を取附けた踊場——それは直ぐに常住の平和を思はせた。家具調度はすべて重代持傳への物らしかつた。寢臺、椅子、ソファ、長椅子、箆筒、皆今日此頃には見られない舊い型の物ばかりであつた。明るい黄色、空色などで柔かな配色のした天井の真中の處に、薔薇の花環又は龜甲琴、炬火、箭筒と言つたやうな模様飾がしてあつた。壁紙や絨毯の上の花把は、大方色が褪せて眼に留らなかつた。

金箱の剥げた竿から白い質素な窓帷が垂れて居る。ロココ式の妻見が然うした古代を想はせるやうな物の形を臙ろに映すと同時に、——丁度荒野の水潦の投影で見るやうな、——鬱悒な非現實的な氣分がその影の上に漲つた。

「私此處へ来て嬉しくて堪らないの。」幽靜な場所のチャームに沁み入られたイ、ポリイタが斯う叫んだ。肘懸椅子に深く乗掛つて、倚靠に頭を支へた。それには白絲の粗末な三日月形のクロセ編が附けてあつた。「何時までだつて斯うして居たい。」

彼女の心には、死んだ伯母のジョヴァナのことや、自分の子供の時の事が浮んだ。

「伯母さんが居ればねえ。丁度此館みたいな家で、有る物は百年でも其の儘の形で靜として居るといふ風だつたの。始終然う思つちや氣の毒にならないんですが、私造花の入つた環細工を壊しちやつてね。伯母さん泣いてよ

…濟まなかつたわねえ。那の黒線帯の帽子的下から、白髪の毛が斯う頬の上へ解れ掛つたところが眼に見えるやうで…。」

句切々々て息んでは徐々と話した。眼は暖爐の燃火の方を凝視めて居た。そしてちよいちよいジョルジオに笑み掛けるやうに其の眼を擧げたけれど、何處か伏目で、其の縁に燻んだ紫色の隈が晝れて居た。街の方からは登石を敲く石切屋の規則正しい傭い響が聞えて居た。

「その家の中に、二つ三つ窓の附いた草置場があつて、其處に鳩が飼つてあつたのよ。其處へは眞直な小梯子で行けるやうになつてたの。その壁には何時からともなく、毛もない、乾いた野兎の皮が、交又へた葦の兩端から引懸けてあつたの。毎日のやうに私鳩に餌を運んで行つてやるとね、それを既う嗅附けちや、皆扉の處へ集つて来るぢやありませんか。包圍攻撃つて言ふんでせう。それから坐つて其處等中へ麥を撒いてやるの。皆ずらりと立圍つてよ。皆白鳩なの。凝と餌を拾ふのを眺めてるとね、何處かの家

て笛の音がするの。毎も同じ節で同じ時刻に。それは快い心持だつたわ。私窓の處へ首出して、ぼかんと口を開いて聴いてる圖つたら、その節を吸込ひと言つた形だつたの。何時となし紛れたのが、一羽飛込んで来ちや、此の頭髪の上ではたばたして、頭髪中が柔毛だらけさ。見えない笛の音は相滲らず鳴つてる…節は耳に着いてる。私その節眞似出来るやうになつたのよ。此の場合で子供の時に覺えたのが始まりで、到頭音楽が大好きになつちやつたの…。」

斯うして彼女は心の中で、昔のアルバノの笛の節を繰返して見た。その快さを味ふには一種の哀愁があつた。妻となつた女が幾年か後に婚禮の時の贈り物の匣の底から糖果を一つ見附け出した時のやうな哀愁がそれであつた。ちよつと沈黙が來た。閑かな家の廊下に鈴の音がした。

「一羽の跛の斑鳩が部屋の中へびよんびよん這入つて來た事があつたの。それは伯母さんの一番氣に入りの鳩でね。と或る時、近所の可愛いブロン



ドの娘で、クラリイチェといふのが遊びませうつて來たの。伯母さんは其の時寒冒引いて寝てたの。私達二人は築山で撫子の鉢を顛覆したりなどして遊んでますとね、その斑鳩がひよいと窓闕へ來て、罪の無い貌をして這箇をまじまじ視てゐると思つたら、隅つこへ這入つて日向焙してゐるの。クラリイチェがそれを見ると、突如飛んで行つて捕捉へようとする。鳩はすと摺抜けて、えつちらおつちら跛牽いて行く恰好つたらないもんですからね、可笑しくつて可笑しくつて底止なしに笑つたの。到頭クラリイチェが押壓へちやつたの。まあ酷い娘だわね。あんまり笑つて私達は踏躑しちやつてよ。鳩は捕つてぶるぶる可怕がつてるの。クラリイチェが羽を一本引つて抜いたの。それからね、憶ひ出しても竦とするわ、私の眼の前でだんだんに引籠つて、とうとう眞裸にしちやつたんですもの。きやつきやつ言つてね、それや私だつて釣込まれて面白がつたけど。那の娘はもう夢中だつたんですわね。鳩は可哀さうに裸に剝かれる、血は流れるして、辛との事て

宥して貰つて舍へ遁げて行きましたわ。それを復た二人が追掛けようとする、丁度ちりちりんと鈴の音がして、病床で咳をして居る伯母さんに呼ばれたもんですから……クラリイチェは梯子段を傳はつて這げ込む。私は窓帷の影へ隠れる。——鳩はその晩死んぢやつてよ。殺生の罪が私といふことになつて、羅馬へ遣られたの。もうそれから伯母さんには二度と遇へなかつたわ。私甚麼に泣いたてせう。でも此の後悔は何時までも消えますまい。」

句切句切で息んでは徐々と話した。腫れぼつたい眼は凝と燃火の方に向いて居た。其の火は女を吸ひ著けて癡醉を起させるやうに見えた。街の方からは、磔石を敲く石切屋の、規則正しい傭い響が聞えて居た。

六

或る時二人はネミの湖水から疲れて歸つて來た。彼等は火のやうな盛り  
の山茶の花に覆はれたチエザリニの別荘の食事をして來たのであつた。  
深々と青澄んだ氷河のやうに冷く、視て視透されぬ「デアナの鏡」を、彼等は  
深く考へさせられて來た。——秘密な事物の最後の秘密、それを洞察かうと  
する彼には、他人の知らぬ情緒が涌いた。

二人は毎ものやうに茶を淹れさせた。靴を開けて物を捜して居たイッポ  
リイタが、偶と男の方を顧みつて、紐で結へた紙の束を出して見せた。

「これ皆な貴郎から下すつたお手紙よ……何處へでも提げて行くの。」  
ジョルジオは満足の色を見せて叫んだ。「悉皆？ 悉皆持つてるのか。」  
「然うなの。悉皆。葉書から電報までもあつてよ。唯一枚だけ家で見  
附かりさうだつたので、焼いた葉書が惜しいと思ふんだけど、焼屑は拾つと  
いたわ。でも文字は幾らか分るの。」

「どれ見せな。」

人焦らしな素振で束つた手紙を押隠した。ジョルジオが笑み掛けてその  
方へ寄つて行くと、すつと隣の室へ遁込んだ。

「不可い不可い。見ちや不厭あ。見せるもんですか。」

半分は笑談から、半分は矜誇と疑懼から頭を振つた。始終大切な寶玉の  
やうにして納つて居る物を、書者の男にすら見せることは忌々しく思はれ  
た。

「ええ？ 見せたつて可いだらう。二年前の手紙つて、甚廢事を書いたか

な。見たいもんだな。」

「狂熱の文句よ。」

「お見せよ。」

到頭男の蝶えた言葉に牽かされて、笑ひつつ頷いた。

「せめてお茶の来るまで待つて頂戴な。それから一緒に讀むことにして

火を燃して上げて？」

「要らない。大分今日は暖かだ。」

雲の霽れた日のことと、銀色の光波はだらけた空氣に流れ込んだ。疲れた日は、紗の窓帷を透る途中で柔かになった。チエザリニの別荘で摘んで来た香の高いオレトは室中を噓ばせた。

「バンクラチオでせう。」扉を叩く音を聴きつけて女が斯う。

忠實なバンクラチオといふ僕が、その毎も莞爾した顔を見せて、茶を浪々と持つて来た。テーブルに茶道具を置いて、夕飯の註文を聴いて、軽い彈力

のある足取りをして引退つた。頭はすつべり禿げて了つて居るけれど、何處かに子供つぼい處が残つて居た。慈悲の相が一面に漂つて、丁度日本の佛像に見るやうな微笑を浮べた細い切れの長い心持斜かひの眼元をして居た。

ジョルジオは、「茶よりバンクラチオの方が氣紛らしになる。」

如何にも茶は香氣がなかつたけれど、その代りに附屬の品々の力で別な味がした。砂糖壺に茶碗は、曾て見ない形の物であつた。茶器には或る田舎風の戀物語が描いてある。刻んだ檸檬の盛つた皿の心に太文字で韻の押んだ謎が染めてあつた。

イッポリイタは茶を注いだ。茶碗から立騰る湯氣は香爐のやうに見えた。その時女は紙束を解いた。小い束に分類して結へてあつた手紙がばらりと落ちた。

「随分あるぢやないか！」とジョルジオが呆れた。

「那樣にたんとでもないわ——二百と九十四通しきやないんですもの。考へて御覽なさいな、二年と言やあ日數に積つても七百三十日ぢやなくつて？」

二人は笑み交した。テイブルの前に並んで二人で讀出した。自分の戀の證文を見せ附けられたジオルジオは、一種のデリケートな強い感情を受けずに居られなかつた。讀掛けて見て可惑しい氣がして來た。手紙に書いてある處から見ると、當時には這麼極端な事を考へ込んで居たものかと、暫時は容易に信じられさうもなかつた。抒情的な高調した文句を讀んで行くとき、今更氣が遠くなるやうに思はれる。當時の情熱の激しさ、物狂はしさは、漫ろに身毛を竦たしめる。——斯うした落着いた穩かな家の中で、今のやうな平滑かな氣分に包まれてゐることを思ひ比べると、一層それが際立つて見える。

斯う書いた手紙が出た。「其の夜君の爲に、我が心臟の嗚咽した有様は奈

何でしたらう。影暗き悶えは、短い睡眠の間々にも僕を虐げるのです。わが靈魂の深い深い底から出現する幻影を避ける爲に、幾度眼を睜いたてせう。……僕には今、唯一つの物思ひしかありません——此の一つに僕は苛まれて居ます——若しも君が僕を離れて遠くへ行つて了ひはせぬか、それです。此の考想ほど物狂はしく、苦しく、怖ろしく僕の靈を刺貫くものはありません。決してありません。今僕に確信があります。積極的な、顯著な確信です——君が無ければ、ライフは僕に不可能だといふ事です。君が若しか奈何かなる、然う思ふだけで日は忽ち黒闇となります。明るい光輝が忌忌しくなります。大地は底知れぬ墳穴のやうに見えて、自分は死滅の状態に入つて了ひます。」

イッポリイタが出發してから書いた手紙には、斯う。「非常な努力で此のペンを把る。生氣も意志も盡果してゐる。堪へがたいライフの辛さ、それだけが自分の外部生活に残つた感じだ。然う思ふほど太甚しい沮喪に陥つ

て居る。日は灰色に、窒息るやうに、重い鉛のやうに感じられる。謂はば人を惱殺するやうな日だ。時間の経つのが可憐しい程緩い。其の間、一秒一秒に不幸が増大する。——いよいよ可怖しく、いよいよ無慈悲に。身體の奥に死んだやうな古池が、幾つも幾つも澱んで居て禍をすること見える。此の苦痛は果して肉體的か、精神的か。僕には分らない。此の身を殺すでもなしに、寸々に碎き潰すやうな重い悩みを負うて、無抵抗な、麻痺した生活を、唯無意味に續けて居るといふ許りだ。』

又這麼のがある。『到頭今日四時丁度氣の萎えかゝつて居る最中に君の返事に接した。幾度讀返したらう。文字の中から君の口に得出さない靈の秘密——無神経な紙に現れて居る文字以外に一層の生氣と感味とを見出すために繰返し繰返し幾度讀取つたか知れない。……僕は君に對する凄惨じいデジイルに擒はれて居る。其の紙の表に、君の手や呼吸や視線の痕跡を捜して見たが——駄目だ。君の顔を髣髴する事さへ慍へば、何物に代

へても惜しくはないのだ。君の長い間吻を接けた花を送つて呉れ。紙の上へ唇を押附けて、其處のところへ圈を畫いて置いて呉れ。遠くから送つて呉れる媚愛の心持を想像させて欲しい。……遠くから、遠くから。接吻もせず、抱擁もせず、其の顔の蒼白くなるのを見もせぬ内に、孰れ丈の時日が経つた了つたらう。一箇年？ 一世紀？ 何處へ君は行つて了つたか。何處の土地まで？ 孰の海を越えて？ ……僕は物思ひの倦怠の裡に時を過して居る。此の室の陰氣さは墳穴のやうに成つた。折々棺の中に臥た自分が目に映る。靜かに澄切つた心持で、死體のやうに固まつた自分の姿が見える。其の後に爽とした氣分になる。』

斯うした幾通かのラヴレターは、質素な布の掛つたテーブルの上で、聲有るもののやうに叫び呻いた。田舎風の茶碗には、何知らぬ蒸氣がすうすうと舞騰つた。

『私その時始めて羅馬を出たんでせう。』イッポリイタが言つた。『而もたつ

十五日間。

ジョルジオは、前方狂亂の體で彼女に溺れたことを憶ひ込んで居た。其の心持を復た喚び活けて味つて見ようとするけれど、周圍が安靜なためにその努力の効はなかつた。彼の精神は、此の安靜な感じの裡に緩く封じられた。面帕の懸つた光線、熱い茶、ギョレットの匂、イッポリイタの肌ざはり、——それらが彼を痺した。『して見ると、以前の熱心が衰へて來たのだらうか。然らうぢやない。此間不在の時だつて、随分辛い思ひをさせられたんだもの。』けれど、久しい前の自分と、今日の自分との間の距離は、逆も接合けて了ふ譯に行かなかつた。奈何跪いて見ても、自分と、那の驚怖や絶望を書き現した男とを同じ人と思ふことは、既う出來なかつた。然うした戀の蒸騰は、彼は餘所事のやうに成つて了つて居たことを感じた。孰の言葉も言葉も、すべて空虚だと感じた。よく墓地で見る碑銘のやうな手紙ばかりだと思つた。碑銘は故人に關する粗雑な、虚偽な概念しか與へない。それと同じく

これらの手紙も、彼の戀が通つて來た種々な心の状態をいい加減に見せて居るだけであつた。ラヴレタアを書く時には、誰でも一種の情熱に囚はれるものだ。此の情熱が燃立つと、いろいろの感情の波が一時に立つて、亂調な騒ぎが惹起される。何を書いて可いかといふことが書者には分らなくなる。甘い言葉に副ふだけの材料がないに困る。そこで、有體に實際の感じを書く代りに、誇張した言葉や、亂暴な美辭を使つて、無暗に熱度を高めて書く。ラヴレタアといふものは、孰を見ても大抵同じやうな事が書いてある。理由は其處にある。高調した情緒の用語は、謔語にも似たブウアなものだ。

彼は思つた。『手紙を見ると、何處も彼處も激烈と混亂と過度だらけだ。俺のデリケエトな感じといふものが何處に出て居る？ 細かい紛糾つたメランコリアが何處に出てゐる？ 奥深い、紆曲つた哀愁が何處に見られる？ —— 那の解されない迷宮の中を漂泊つて行く様な心持が——』平生

始終深い注意を拂つて、修練を重ねた微妙な心が、此の手紙に全く缺けて居ると氣附くことは、彼には無情かつた。讀んで行く中に、徒の饒舌の部分は、ばつばと飛ばして、時々細かい出來事の説明でなく、記憶すべき物語の暗示文を求めることにした。

一通には斯うあつた。「六時頃に何時の晩方にも君と出遇つたモルテオの園へ飄然と這入つた。君の出發前三十五分間は僕には苛責であつた。君は發つた。君に暇を告げて、接吻を顔に浴せて、もう一度忘れるな、忘れるな。」を繰返す暇も與へずに去つて了つた。十一時頃になると、本能的に僕は願つて見た。君の先夫は友人と、毎も仲間になる一人の婦人を連れて這入つて來た。必と其の人達は君を見送つて歸つて來たのだ。其の時僕には酷い苦痛の痙攣が起つたから、直ぐ立つて外へ出た。其の三人は何も異つた事はないと言つた貌で、毎もの夜の通りに笑つて話して居た。それを見た僕は腹が立つてならなかつた。君の出發——赦して置けない君の

出發を、その三人が眼前疑ひを霽すといふ風に、證據立てて居たのだ。」

夏の夜毎にイッポリイタが先夫と一人の歩兵大尉との真中に介つて、大尉の真向うには、小柄な意味の無い顔をした婦人が居て、ティブルを圍んで坐つてゐるのを見たことを考へ出した。彼は此の三人とも知らない人であつた。が、三人の身振、容態、それから野暮臭い様子が、一々彼には面白くなかつた。刺撃の皆無な物語に、此の勿體ないやうな戀人が、辛抱強く耳を貸して居る圖を、想像の中で描いて見た。

又一通に、「僕は疑惑を起して居る。君に對して讎敵の思ひがする。何處となく腹立たしい氣が満ちて居る。直ぐ出て行つて海へ入る。浪は輕快で力強い。左様なら、厭味を言つても始まらないから、もう書くことは止す。左様なら、君は僕を愛するのか。それとも氣の弱い處から、習慣的に戀の多辯を弄するのか。真心があるのか。何を考へて居る。何を爲して居る。あゝ可惱しい。斯う詰問するのも至當な事だ。疑る、疑る、疑る。氣

が變になる。』

『それは。』イッポリイタが言ふ。『私がリミニに居た時分よ。八月九月といふんですもの、酷い暴風つてなかつたの。貴郎到頭その時「ドンファン」丸て來らしつたのね。』

『これだらう船の中で書いたのは。「本日二時、サン・ジェルジオ港よりアンコナに參り碇船致し候。君の祝禱と好意にて順風を得申し候。渡海の奇談は緩々物語るべく候。早朝には再び沖合に浮び出づべく候。ドンファンは沿海貿易船の王に候。君の旗は橋頭高く翻り居り候。さらば明日を期して。九月二日。』』

『復た遇つてね。随分併し苦しかつたわ。覚えてるでせう。のべつに張番されてるのですもの。可愛い姉も居てよ。マラテスタ家の菩提寺も見に行つたわね。お發ちの前の晩に、サン・ジリアノのお寺へも巡禮して行つたこと覚えてて？』

『エネチアから寄越したのがこれだ……。』

それを二人で讀交した時には、同じやうに動悸が搏つた。

『九日からはエネチアに居る。plus triste que jamais(次第に悲哀が募る)。エネチアは僕を癡醉させる。如何に光輝ある夢も、イルウジョンに似た空の波と花から浮き出して來る此の大理石の夢とは、逆も華々しさを比べるに足りない。僕は鬱憂の激情のために死に瀕して居る。何爲君は此地に來ない。噫、來て欲しい！君の最初の思ひ立を實行しさへすれば可いのだのに。目鯨立てて見て居られようとも、一時間位は奈何にでもならうものを。すれば二人の「追憶」の寶庫の中へ、一番貴い追憶がもう一つ餘計に加へられたところだのに……。』

又別の手紙に、『僕は妙な事を思つて居る。引切無しに電光のやうに心を貫き、全身を顛倒させて居る。莫迦な夢のやうな考想だ——若しかすると君が出掛けて來るかも知れない。不意に、ひよつくらやつて來て、僕の所



有になるかも知れないと、然う思つて居る。」

「エネチアの美は、自然と君の美の隈取りになる。蒼白い琥珀か、鈍い黄金の豊かに暖かな君の顔色——萎れ行く薔薇の影差すやうな——顔色は、此のエネチアの空氣と見ん事調和する。それほど理想の色に出来て居る。僕はチプロの女王カテリナ・コルナロオが甚麼顔をして居たかは知らないが、何となく君に肖て居たやうに思へてならない。昨日丁度チプロ女王の大宮殿に面したカナラツオを通つて詩想を呼吸して來た。曩日君は此の王宮に棲んで居たことがあつたらう。そして寶玉の露臺に凭れて、水の面に散る日光に眺め入つただらう。——左様なら、イッポリイタ。カナアルグラデには君の光彩に相應しいやうな大理石の宮殿はない。君もまた自己の運命の主宰者ではない……。」

「此處にはバオロ・エロネエゼの名譽の作が總べて聚まつて居る。其の一つを觀た時に、直ぐ二人でリミニのサン・ジウリアノの寺へ參詣したことが憶

ひ出された。——随分佗しい晩だつた。寺を出て、川縁の田舎道を何處までもといふ風に、遠くの森の方へ歩いたね。記えて居るだらう。もうそれからは顔も合さず、話した事も無い。其限になつて了つた。——此處で若し不意に君がギニョオラから此のエネチアへ來て呉れたら！」

「それが貴郎。」イッポリイタが、「氣の遠くなるやうな抵抗の出來ない誘惑だつたのですもの。私貴郎の思つてらつしやるよりは、もつと苦しい思ひをしましたわ。每晚寝もせずに、奈何したらお客に氣取られないで抜け出せるだらうと、そればかりを思ひ詰めて居たのよ。私可怕しい智慧が廻つたのね。それから甚麼事をしたか覚えて居ない。と、九月の或る早曉に貴郎と二人ゴンドラに乗つて、カナアル・グランデに居ると氣附いた時は、眞事とは思へなかつたの。ねえ貴郎。私泣き囁きを始めちやつて、口も利けなかつたわねえ。」

「だが俺も——俺もお前を待たせ。甚麼工面をしても、必とお前は出て

来る者と思つてたから。」

『だけど、それが軽率の始まりだつたと思ふわ。』

『それや然うだ。』

『構ふもんですか。それだけいい事をしたんぢやなくつて。私が全く貴郎の所有なら、それだけいい事をしたんぢやなくつて。私の方には何も悔む事はないの。』

ジョルジオは女の瀟灑へ接吻した。女はその時の物語を良久續けた。多くの追憶の中で、一番楽しく、一番飛離れた事柄でもあつた。二人は、ダニエリ旅館に忍んで滞在した二日間を、一分々々にもう一度暮し直して見るといふ風であつた。それは昏迷の頂上、前後を忘れた二日間であつた。其の時は二人とも、世の中といふ考想も、互ひの前身といふ意識も、まるで失くして了つて居た。

然うして居る中に、イッポリイタの破滅が始まつて来て居た。此の後の數

通の手紙には、女の最初の頃の難儀に言ひ及んで居る。『君の苦痛と、君の家庭上の紛擾が皆僕から出て居ると思ふと、何とも言へない悔恨に身を裂かれる。僕から出た禍の赦免を求め、爲に、何卒僕の熱情の深さを底まで洞察いて貰ひたく思ふ。此の熱狂が君に解るか。僕の戀が、君の長い間の惱みに酬い得るといふことを信じて居てくれるか。必と然う眞に信じて居てくれるか。』熱度は一頁々々に昂まつて行つた。すると、四月から七月までの手紙が抜けて、其の間が不明になつて居る。大破裂が起つたのは、此の四箇月の間であつた。弱い夫は、イッポリイタの露な、頑固な反逆に打克つ事が出来なかつたので、失踪をするやうな事になつた。面倒な事件が後へ残つた。財産の大半を摺つたやうな事件であつた。イッポリイタは、初めは自分の母親と連れて、後にはカロンノオに居た妹と一緒に、田舎家に潜んだ。引續き、子供の時分に大患ひした、可怖しい癲癇性の神経病に憑依された。八月の日附の手紙の中には、それを書いたのがある。『奈何して、逆も僕の心

を囚へた恐怖を理解する事は君には出来ない。何よりも心を悩まされるのは瞭乎した幻影が憑依いて離れないことだ。君の身悶えして苦む態が、眼に見える。君の顔の扭れて蒼褪めた態や、眸子が目眶の奥で希望無げに廻轉するのも見える。……丁度君の傍に居る位、君の可怕的病氣が悉皆見える。而已ならず甚麼に腕に腕に此の幻影を逐拂ふことは出来ない。その内に自分が呼ばれて居るやうな氣がする。救ひを呼んでも救はれる望みの無い人のやうな皺唄れた悲しい聲が君の聲となつて聞えて来る。『それから三日後には、『もう此の文を書くのにも疲れた。唯凝と静かに薄暗い隅の方で、君の姿を喚起し、君の病氣を喚起して、君を眺めて許り居たい。——噫、哀れな哀れな我が戀人よ。餘りに味氣無さの末は、長い間生存の感覺を喪失して了つて、再び醒覺めて後も、何物をも記憶せず、何物にも悩まされないやうになりたく思ふ。劇しい肉體の痙攣でも可い、怪我でも大火傷でも何でも可いから、そんな事て此の頑固な精神の苦悶を緩和させて欲しい。』

い。——驚くではないか、君の手は蒼くて痙攣して居る。指の間には引巻つた髪の毛が捲き附いて居る……。』

少し後へ行くと、『君の手紙に、此の病氣が貴郎のお腕に懸つて居る時に起つたのだつたら——。否え否え。もうお目には掛りますまい。も一度お顔を見ようとも思ひません。』とある。物に狂つて然う書いたか。書いた事が解つて居たのか。丁度僕のライフを奪つたやうなものだ。丁度呼吸を窒められたやうなものだ。疾く次の手紙を。病氣の痊つたこと、始終僕に遇ひたがつて居るといふこと、それが聞かして欲しい。奈何しても回復してくれなくてはならない。いいか、イッポリイタ。必と痊つてくれるだらう。』

『其の夜月は隠れて居た。僕と一人の友人とは海岸を歩いた。僕が、佗しい夜だなあ。』と言へば、友は、然うさ、良い夜ぢやない』と答へて凝と佇立つた。犬が遠くて咆えて居る。友の言つた語から受けた不氣味な印象を、奈何君

に言ひ現せば可いだらう。——「良○夜○ぢ○や○ない。」——何事が遠方で起つたらう。君は奈何しただらう。甚○麼○慘○事○が此の夜中に醸されただらう。東雲近く迄夜の鳥どもが啼き連れて居た。不○斷○は那樣ものに氣など惹かれはしない。此の晩に限つて一聲々々が堪らぬ程の響きを僕の胸の底に傳へたのだ……。」

「君が絶望する道理はない。昨日は殆ど終日内に居て君の病状を知る爲に、神経病に關する論文を讀んで見た。大丈夫君は痊る。もう是から發作に襲はれる憂もなく、病後を無事に經過して眞個の健康體となることは請合だ。氣を取直す可い。——其の夜一夜を君の事に思ひ煩つたのが通じたか。それは讚美歌の漂ふ物哀れな暗い夜だつた。街道の垣根と竝木の中から、巡禮等が長い單調な歌を唱ひながら通つて行つた……。」

病後の頃の手紙には優しい細かい心が籠つて居た。「沙濱で採つた花を君に贈る。野百合の一種で、生えて居る處は目を覺すやうだ。香氣も非常

に高い。時々此の蓋形の花の底に酔拂つた蟲がへとへとになつて這入つて居るくらゐだ。海岸一帯は斯ういふバッシュネットな百合で埋められて居る。燦けつく太陽の下煮え返る沙の上で、此の花が見る間に開いて、二三時間生つ。何て愛らしい花だらう。枯れても尙且此の通りだ。奈何だらう、デリケートで清淨で女らしいことは。」

「今朝早く起きて見ると、僕の體が日に焦がされて了つて居る。胸の肌が一面にぼろ／＼になつて居る。殊に君の頭を置くに慣れた肩の上邊りが太甚しい。指で其の皮膚をそろ／＼毫つて行くに附けて、斯ういふ疵の上に君の頬や口の痕が残つて居るといふ事が思はれる。皮一重蛻いて了つたところは丁度蛇のやうだ。此の皮膚に孰れ位の快樂があつたらう。」

「尙だ牀の上で書いて居る。熱は去つたが、左の眼の上に神経痛が残つて居て痛い。三日間物を喰はないから、なかく元氣が回復しない。牀に潜り込んで病める頭を抱へて種々な物思ひに沈んで居る。偶と譯もなく疑

惑に喰入られるやうな事もある。非常な努力を須ひなければ此の不祥な  
考想は退かない。昨日も昨日で終日君の事を考へ通した。姉のクリスチ  
イナがそれはく物優しく傍に居て額を拭いて呉れなどした。僕は眼を  
瞑ちてその手が君のであるやうに想像した。と同時に言ふに言はれぬ慰  
めを感じて胸の中で君の名を呟いた。嬉しさに笑み掛けて姉を見入  
つた。そして此の際の僕の想像裡に起つた君と姉との愛情の交錯ほど純  
潔に又靈的に思はれた事はなかつた。然うした感情の繊美と微妙と醇粹  
とは、逆も言葉で言現すことは出来ない。併し君には理解出来るだらう。  
左様なら。」

「悲哀は永久に續く。姉から貰つた最後の薔薇の葉が、一片一片卓子の上  
に落ちるのを聴くやうな可厭な感じがする。それが落散る有様は、君の腦  
中の物思ひのやうに美しい。開いた窓から海水浴の女や子供のさゝめき  
が聞えて来る。」

十一月の初旬までは、手紙に斷れ目もなく續いて居る。が幾らかづつ厭  
味が加はり疑惑や苦情が這入つて來た。

「随分遠くまで離れて行つたものだ。僕の苦められるのは唯單に肉體が  
引分けられたといふのみでない。何となく君の精神までが僕を後に見棄  
てて了つたやうな氣がする。…君の芳香は他人を愉快ならしめる。君を  
眺めたり君の聲を聴くのは、皆君を味ふ意味ではないか。…手紙を與れ。  
是非聴きたい。—すべての動作、すべての思想について、君は全く僕の所有  
か。僕を熱求して居るか。僕を惜んで居るか。一人て居てはライフの何  
處にも美が見出せないか。」次には、「考へて考へて、その考に針を打たれて  
居る。此の針から可忌な苦情が出て來る。時々此の手で觸れない針を疼  
く瀬瀧から拔取らうとして、狂氣のやうになることがある。けれどもそれ  
は鈍よりも強くて硬い。呼吸するにも堪へ難い疲労を感ずる。血管の疼  
痛は鐵鎚で敲くやうな音を立てて全身を廻る。多分僕は此の音を聴くや

うに運命づけられたのかも知れない。……それが戀か。奈何して奈何して。これは僕の身に限つて根を張る一種の奇怪な病だ。僕は之に歡喜し之に殉難する。斯うした感覺は他の一切の人の經驗しないことだと思つて喜んでゐる。』

その次に、『決して決して完全な平和と完全な安易とは僕に来る時はあ  
るまい。唯斯ういふ境遇に満足して居られれば可いのだ——君の全心身  
を吸収し盡すといふこと。言換へれば君と僕が同一體に外ならぬといふ  
こと。僕のライフは君のライフ。僕の思想が君の思想といふこと。てな  
くば尠くも僕から派生した感覺でなければ、一切君が感受しないやうにと  
いふことが望ましい。……僕は哀むべき一個の病患者だ。過ぎ行く日は、僕  
には苦痛の連鎖である。その日々を終ることを滅多に願はなかつた僕が、  
今は熱心に祈つて居る。太陽は沈み掛けて居る。僕の靈に落降る夜は、無  
数の恐怖に僕を包む。陰影は室の隅々から蔓延つて、生きた者の如く僕に

迫つて来る。その聲音も呼吸も聞えるやうに思ふ。敵意を含んだその姿  
も目に見えるやうだ……』

『昨日十一時から一時迄の間に、僕は自分の最後に就いて眞剣に考へて見  
た。僕の可傷しい叔父のデメトリオの靈が、二三日僕の心を動搖させて居  
た。昨日などは心持が變になつて、偶と解除といふ空想が浮んで出た。良  
有つてその危機も去つた。今は斯うして笑つて居られるが、實は「死」とは可  
なり激烈な談判を試みたのだ。』

イッポリイタの歸りを待つために、ジョルジオは十一月の上旬に羅馬へ歸つ  
て居た。そして其の頃の日附の手紙には、面白からぬ可憂しい話が載つて  
居た。『君の手紙に據ると心溢りをすまいと思つて甚廢に氣を揉んだか知  
れませんか。』とあつた。之は奈何いふ意味か。動盪させられたといふ其の  
可怖しい事件といふのは何か。噫君も變つた。その爲に僕の苦痛は譬へ  
やうもない。そして自分の矜誇は苦痛に搔亂される。僕の眉根に疵の裂

開程の深い皺が出来た。其の中へ歴へた忿怒が溜つた。苦い疑惑と不快の塊も集まつた。君の接吻でも、此の皺を取拂ふことは難しからうと思つて居る。デジイルに打頼へた君の手紙に僕は迷はされる。餘り有難いとも思はない。二三日何となく君に裏切するやうな感じが起つて居る。それが何だかは分らない。多分一種の豫感か。それとも前兆なのか。』

読んで行く中にジョルジオは、疵口の裂けたやうな苦惱を見せた。イッポリイタは讀續けることを止めさせたかつた。彼女は那の晩のことを覚えて居た。——先の男が突然にカロンノオの隠れ家へ飛込んで来て、冷かな、穏かな顔はしながらも、狂人らしい眼附をして、女は俺が連れて歸ると喚く。その時は、男と唯二人別室で差向ひであつた。窓帷は風に吹捲られた。燈火もそれに連れてぱつと煽つたと思ふと又情乎となつた。樹木のみしみしいふ音は下から其の方へ來た。殘虐な無言の格闘、力づくに女を強曳いて行かうとして、突如掴み附く——あれえ！——

『澤山澤山。』ジョルジオの首を自分の方へ引寄せて言つた。『澤山ですつてば。もう讀むの廢しませう。』

それでも彼は續けたかつた。『其の男の出て來たといふ譯が解らない。俺には忿怒の情を禁めることは出來ない。それが而もお前の方にまでも傳はつて行く。が、餘り苦しい思をさせない爲に、此の事に就いては自分の考を書くことは見合はせる。書けば苛辛い懊惱したことだ。俺の愛情に少し毒が混つた氣がする。或は再會しない方が可いかも知れない。無益な苦痛をすまいと思へば、今歸つて來ては不可い。今俺は面白くない。心の底ではお前を嘆美する程に愛して居るが、考想はお前を引裂いたり泥を塗つたりする。此のコントラストは不斷に新らしくなつて、終極の時はあるまい。』其の翌日の分には斯う書いた。『あゝ、苦しい。殘虐の苦み、今までにない切羽詰つた苦みだ。あゝ、イッポリイタ、歸つてくれ、歸つてくれ。是非遇ひたい。話したい。懺えたい。懺が慕つて來る。だが疵痕ばかりは俺

に見せないでくれ。其の疵のことを思ふと、懸念なしに、忿怒なしには居られない。お前の肉に、男の手で印けた痕を見せられたら、此の心臓が破裂するかも知れない……竦とする。竦とする。」

「澤山よ、貴郎。もう廢しませうよ。」復たイッポリイタが頼むやうにした。男の首を両手で捉へて、其の眼に唇を接けた。「後生ですつてば、貴郎。」

彼女は到頭、テイブルから男を離した。男には譬へがたいやうな微笑が浮いた。それは病患者が、自分では治療の手遅れになつたことを熱く知りつつも、傍の人の言ふなりにさせて置くと言つた時に見せるやうな微笑であつた。

七

1917. 21. 5

受苦日の晩方、二人は羅馬へ歸ることになつた。

出發の前、五時頃に茶を喫んだ。那箇も口は開かなかつた。古い旅館での簡易な生活は、二人には不思議な程美しく可慕しく思はれた。それが已ら終らうとして居る。質素な宿の親みが、だんだん心行くやうに、だんだん深くなり勝つて見えた。歩き廻つた場所、悲しみ、うれしみ、それらは皆心の火に照らされてばつと輝いた。それも亦「時」の淵に落ちて消えた戀と生命との断片であつた。



ジョルジオが、  
「それもお終か。」

「イッポリイタは、  
「奈何すれば可いてせう。もう私貴郎のお胸より外に眠る處が無いやう  
な氣がしますの。」

眼を見交して、互ひの情緒を通はせた。吭は涌き上る波で窒息るやうに  
感じられた。良久は言葉もなかつた。甃石を敲く石切屋の規則正しい構  
い響に凝と耳を敲けた。けれども、その苛立たせるやうな躁音は次第に二  
人の不安を高めて行つた。

ジョルジオは起上りながら、

「あゝ聞辛い。」

間を極めて撃つ音は、時の経過を思はせた。此の感じは前から彼の心に  
強く留つて居た。始終振子の擺れる音を聞いて経験した、追掛けられるや

うな恐怖心が、石の音で復た呼返された。併し此間中は、その音で何とも知  
れぬ快い心の状態に引入られたてはなかつたか。彼は斯う思つた。「今  
二三時間の中に二人は別れて了ふ。極り切つた話が復た始まる。その生  
活は、唯不幸の連鎖に過ぎない。痼疾には又捕まるだらうし、加之春先にも  
なれば、又面倒が起るに違ひない。殆ど苦痛の絶え間はあるまい。おまけ  
に、エキジリに嘘さ込まれた那の考想が、無慈悲に自分を責立てさうな氣も  
してならない。幾らイッポリイタが、自分を痊さうとしても、出来得られるこ  
とか奈何か。出来たところて多寡は知れて居る。いや、彼女は何處か幽静  
な處へ——一週間位でなく、長い長い間俺に隨いて來られないといふ道理  
はあるまい。彼女の眞實心は勿體ない程のものだ。細かい注意は深切に  
行届くし、子供らしい愛嬌が何とも言へない。ずつと續いて那の顔を見せ  
て居れば、或は旨く俺を痊すことが出来るかも知れない。然もなくても、も  
つと俺を氣爽にさせるだけの効驗はあるだらう。」

彼はイッポリイタの前に立つて、両手を執りながら訊いた。「此頃中は幸福に思つたか。奈何だ。」

其の聲は他を動かし誘ふといふ風であつた。

「這麼幸福つて今までにないわ。」

此の眞率な返辭にジョルジオは緊乎手を握り締めて、

「平凡な暮りに戻るといふ事を、お前は平氣なのか。」

「私には解らないわ。私前の方は見てませんもの。何も彼も背後になつちやつたぢやありませんか。」

女は眼を伏せた。ジョルジオは情に迫られるといふ風に、兩腕で抱へた。

「お前は俺を愛して居るだらう。お前の生活に、唯た一つの目安になるものは俺だ。此の後も俺ばかりを眺めてるんだ……。」

意ひ掛けない微笑は女の長い睫を引き立てた。

「眞箇よ。解つて下さつて？」

男は聲を落し、顔も下げて斯う附足した。

「俺の病氣は知つてるだらうね。」

奈何いふ考想といふことは、女に飲込めたらしかつた。内證話のやうに、聲を低げて尋ねた。——二人の呼吸したり、鼓動する位置は、その爲にずつと接近したやうであつた。

「私奈何すれば貴郎の御病氣が痊せて？」

二人は沈黙して互ひに腕を取交した。がその沈黙の中に、二人の心は同じ問題を考へたり、取極めたりした。

「一緒に来てくれ。」到頭男が聲を立てた。「何處か知らない土地へ行かう。其處で春中——夏中、何時まででも可いから、静として居よう……それで病氣は痊る。」

猶豫なく斯う女が返辭した。

「私可いの。貴郎の所有ですもの。」

氣が落著いて抱いた手を解いた。發つ時間は既う來て居た。最後の靴に紐も懸けた。イッポリイタは玻璃罎の中の萎びた花をいろいろ取集めた。チエザリニの苑のギオレット。キジイ公園のシクラメンとアネオネとベルギンカ。カステル・ガンドルフの薔薇。エミッサリオの歸途にデアナの浴場の界限で採つた巴旦杏の一枝。それらの花はいづれも彼等の牧歌を語るものであつた。踝まで踏込む枯葉の上を、険しい傾斜に沿つて公園も徜徉した。尖つた蕁麻が彼女の薄い長靴下の上から突刺さつた時は、聲を揚げて笑ひさざめいた。ジオルジオは女の前に立つて、スラッキで莖を薙仆したために、安心して其處が渡つて行けた。緑の滴るやうな無數の蕁麻は、デアナの浴湯の裝飾であつた。其處の不思議な洞窟の窺響は、時とするとぼたぼたと緩く落ちる水の音楽に變つて行つた。そして濕々とした陰影の底からは、巴旦杏や銀光を帯びた淡紅色の桃の樹で埋められた田園が見えた。それは、澄切つた波の淺緑の下で限りなく目を樂ませた。花の數だけ、追憶も

盡きなす。

「御覽なさい。」ジオルジオに一枚の切符を見せて女が、「セニイ・バリアノの切符だわ。私持つてませうね。」

パンクラチオが扉を叩いた。受取證を持つて來た。切れ離れの好い客に感じた彼は、奈何禮を述つて可いかわらなかつた。到頭名刺を二枚衣兜から引出して、不躰ながら檀那樣と奥様に、と言つて差出した。手前の名前を憶ひ出されることも、といふ意味であつた。

僕が引退るや否、此の偽似の若夫婦は噴飯した。名刺を見ると、氣取つた文字で—— Panenzio Petrella としてあつた。

「これも記念に納つとくわ。」

パンクラチオは復た扉を叩いた。奥様のお土産にと見事なオレンジを四五個持つて來た。其の眼は、ルウビー色の顔に輝いた。二人に注意して、「もうお出ましの時刻でござりまするで。」

梯子段を降りる時は、何となく悲しい、可怕しいやうな情が二人の上に落ちた。斯ういふ平和な隠れ家を後にして、何か測り知られぬ危険に向つて行くといふ思ひがした。年老いた亭主は扉口で挨拶をして、殘惜しさうに、

「今晚の御馳走には、上等の天鰯が手に入りましてございますのに。」

ジョルジオは唇を引詰めて、「いや、また其の内——其の内又お世話になります。」と答へた。

二人が停車場の方へ出掛けて行く折しも、深い霧の中に火の色をしたカムバニアの地平線の彼方、海の下へと太陽は沈んで行つた。チッキイナてはびしよびしよと霧雨が降つた。その受苦日の夕暮方、羅馬で二人が別れた時に、濕氣を含んで濃々となつた大市街は二人には死ぬより外はない場所のやうに見られた。

## 二 父 の 家

四月の末にイッポリイタはミラノへ發つた。姉の義母が死ぬといふので、其の方へ呼ばれたのであつた。ジェルジオも同時に旅行の準備をして居た。これは何處か異つて、人の行かない場所を見附ける積りて。五月の中旬には二人が復た落合ふ約束であつた。

が、丁度その時ジェルジオは意外な手紙を母の方から受取つた。母は不幸な目に遭つて、絶望の態であつた。それを知つた彼は親の家へ歸るのを猶豫する所てなかつた。

彼は子の義務として、現實の悲哀のある所へ、是非直ぐに急がなければならぬといふことを思つた。其の時に起つた苦痛の感は、最初に涌いた子の情を、次第次第に壓倒した。そして胸の奥には刺々しく苛々する心が萌した。目の前の葛藤の光景が、段々瞭然と、段々業々しくなつて、良心に巨浪を立てる程、その鋭さが増して來た。苛立たしきは、間もなく非常に度を強めて、全く彼を支配するやうになつた。可憐しい胸を裂く告別それが執拗く手傳つた。

今迄にない殘虐な別離であつた。ジェルジオは殊に烈しい動搖を續けて居た。神經といふ神經は總べて荒び立つて不安の状態がその儘に續いた。既う後の幸福をも、平和をも、信じない人のやうに見えた。イッポリイタが彼に訣別を告げた時には、斯うまで訊いた。

「復た會へると思ふか。」  
女が扉を出る時に、彼は最後の接吻をした。接吻された痕へ、女が黒い面

帕を卸すのを見て居た。此の無意味な光景が深く彼の心を痛めた。容易ならぬ不吉な前兆でもあるやうに思ひ込んで了つた。

ジェルジオの生れ故郷は、グアルデアグレエレである。其處の親の家へ來て母親に抱着いた時は、わあと言つて子供を見るやうに泣いた。それ程氣が痿切つて了つて居た。が然うした抱擁と泣涕も、彼を慰めることは出來なかつた。自分の家でありながら、己は他人のやうに——餘所の家へ訪ねて來た者のやうに思はれた。此の異しい孤獨の感じは、今までも自分の血族との間に、時としては経験したこともあつた。今度は以前よりもずつと鮮かに、ずつと押附けがましく感じられた。無數な家事上の用件に、懷らされ傷つけられた。晝飯の間、夕食の間、フオオクの香の外、總べてが沈黙して居ることは物凄しい程不快であつた。常習の娛樂を試みる間も、絶えず突然な可痛しいシツクを受けた。不和、讎敵の空氣、公然な暗闘が重く此の氣を包んで居て、彼の胸を壓潰した。

著いた其の晩母は竊と彼を呼んで、自分の難儀や、心配や、——夫の不埒不行跡を話し掛けた。可憤しい顔へ聲で、涙含んだ眼を子の方へ向けて、母は

「お前のお父様は、慚知らずだ。」

目眶は紅く腫れ上がつて居た。兩の頬はげつそり憔悴けた。長い間の心遣ひは、身體の何處にも證據を見せて居た。

「慚知らずだ。碌てなし！」

二階の寢室に退つてからも、母の聲音は耳に附いて居た。眼の前にその儼が髣髴く。男の無情を罵る聲が続いて来る。——その男の血は、自分の脈管にも流れて居るのだ。すると彼の胸は重くなつてもう迎も持切れさうもなくなつた。が、突然もだもだするやうな嬉しさに氣が一變した——心は離れて居る戀人の方へ持つて行かれた。同時に、那いふ種々の泣き言を聽かせるやうな母には、些とも感謝する義務はないと思へて來た。母の憂苦が知らずに居たい。戀以外の事に氣を奪られたり、苦められたりするこ

とは奈何しても可忌だ。自分の室に這入つて、びしんと閉切つた。五月の月は露臺の窓を照らした。夜の空氣に飢ゑた彼は、孰の窓も窓も開け放した。欄干に凭れて冷い空氣を胸一ぱいに深く吸ひ込んだ。垠もない平和は、眼下の谿谷を占領した。尙だ雪で眞白なマエルラの御山は、嚴肅な素直な輪廓で、空の濃碧を更に色深く見せた。グアルチアグレエレの町は、羊の羣のやうに、サンタ・マリア・マッジョレを取繞いて眠つて居る。相對した一軒家に燈の點つた一つの窓が、黄ばしつた光の點を打つたやうに見えた。

彼は今日此の頃の痛傷をも忘れた。夜の美に向つては、唯一つの考想しかなかつた——「幸福に溶けた夜だ！……」

疑と耳を澄ました。何處かの既で馬がかくかくと足を鳴らして居る。續いて鈴の音が弱くちりちりいふ。彼の眼は、燈火の點いた其の窓の處へ彷徨つて行つた。四角な燈明の中を、黒い形が眩しく飛び廻つて居る。家の中の人が忙し氣に左右して居るらしい。其の時彼の室の扉を軽く叩

く音がしたやうであつた。怪みながら開けに起つた。

それは伯母のジョコンダであつた。這入つて來た。

「私を忘れかい。」彼に接吻しながら言つた。

然う言へば、此家へ來てから伯母には遇はないので全然忘れて居た。其の申譯をしながら手を執つて坐らせて、可憐しさうな聲で話し掛けた。

伯母のジョコンダはジョルジオの父の姉で既う六十にはなる。いつか跌倒んで跛になつた。背は矮いが病的にでかく肥つて、弛みのある顔の蒼褪めた女だ。信心一方に凝固まつて、此の家の一番上の部屋で己一人の世を送つた。家の人達とは殆ど交渉を持たなかつた。氣の遠い媼さんといふので、誰にも構はれず、可愛がられもしなかつた。伯母の小さい世界は、宗教上の畫像、寶物、徽章、シムボルで満たされて居た。爲事は神への勤行を追つて行くこと、昏々と單調な祈禱に溺れること、持前の食食に崇られて辛い思ひを堪へ堪へして居ること。甘い物が無暗に喰ひたくて居られない。その

癖外の滋養品は些とも好かない。が折々菓子を断らすことがあつた。そこでジョルジオを可愛がつたものだ。——ジョルジオがグアルデアグレエレへ歸る度に必と砂糖漬や、ロソリイの函を土産に持つて來て貰へたからだ。

「まあ……」齒の脱落ちた齒齦と齒齦の間からもぐもぐと、「まあ……」克く歸つてお出でだねえ……ふむ、ふむ、克くまあ……」

何も話と言つて無いのだから、何となくおどおどと甥の機嫌を讀んだ。

その中にも物を待つと言つた風が眼に現れた。それを見るとジョルジオの胸は、堪へ難い可憐しさに潰裂げるやうであつた。心の中で、「此の哀むべき動物は、人間の最下層まで墜ち沈んだのだ。自分は此のなさない食食家と血筋が繋がれて居る。此の伯母とは同類だ。」

眼に見えた不安が、伯母に涌立つた。厚顔しい様子がその眼の中に見えた。幾度でも、

「克くまあ……」克くまあ……」



を繰返して言つた。

「ああ、失つた伯母さん。」ジョルジオは氣が附いて申譯なささうに斯う言つた。「菓子を持つて來るのを忘れて了つた。」

老女の貌附が變つて今にも拘繫れると言つた色になつた。眼は暗くなつた。もともとどと、

「なに、那樣事は奈何でもね……。」

「待つて下さい。明日何か持つて來るから。」慰め貌に然うは言つたが、尙だ胸は沈んで居た。「手紙でもつて……。」

老女は元氣附いた。口疾に、

「それやあお前オルソリイネの舖へさへ行けば……有るともさ。」

暫く無言が続いた。其の間に伯母は翌日の菓子の豫味を舐めて居るらしかつた。滲み出る唾液を嚥込む時の微かな音が、齒の無い口の中で聞えた。

「可愛い兒だねえ……ジョルジオが居てくれなかつたら奈何しよう……。家の今度の紛擾といふものは、全く上帝の刑罰だよ……まあ露臺へ出て、盆栽を見ておくれな。水でも灌けて遣らうと言ふのは私ばかりさ。私は始終ジョルジオのことを忘れはしないよ。曩にはデメトリオといふものが居たが、今ぢや既う誰も無い。お前ばかりだ。」

伯母は起つて甥の手を執つて、一方の露臺へ連れ出した。花の咲いた盆栽を幾つも見せた。一枚のベルガモットの葉を筆つて、ジョルジオに突出して見せた。屈み形に土が乾いても居るかといふ風に檢べて見た。

「お待ちよ。」彼女が言つた。

「何處へ行くんです。伯母さん。」

「お待ちよ。」

跛足曳き曳き何處かへ行つた。と思つたら直ぐ引返して、持てない程水を張つた如露を掲げ出して來た。

「おや。何爲那樣事をなさるんです。御自分で水まで漉らなくつたつて可いぢやありませんか。」

「鉢は水氣を待ち兼ねてるからの。私が氣を注つけてやらなかつた日や誰がお前……。」

彼女は鉢に水を撒けた。見るから氣喘しさうであつた。高齡を思はせる胸元から噎れた喘ぎを聴くことは若い男の苦痛であつた。

「もう可いでせう。もう可いでせう。」伯母の手から如露を引掠つて斯う言つた。

二人は露臺に静と居た。鉢から垂れる雫は、軽く街の上へ落散つた。

「那の燈火の點いた窓は？」此のジオルジオの聲に沈黙は破れた。

「ああ。那はドン・デ・フェンデ・シオリの家さ。彼が死にかかつてるのだよ。」

二人は氣を注けて、四角な黄ばしつた燈明の中に動く人影をうち目成つ

た。老女は、そろそろ冷い夜氣に顫へ出して來た。

「さあ。伯母さんお就眠みなさい。」

彼は一階上の伯母の部屋まで連込まうとした。中の間を通つて行くと、

何とも知れず、重たさうに牀の上をこそごを腹匂つて行くものがある。そ

れは一匹の龜の子であつた。老女は佇立つて、「是はお前と同じ齡の二十

五だが、私の摹似をして跛になつた。お前のお父様が足踢に掛けて……。」

彼は羽毛を引筆られた斑鳩と、ジヴァンナと言つた伯母の事と、アルパノで

費した時間の事を憶ひ出した。

伯母の部屋の闕の處まで來た。病み腐つたやうな臭氣が、部屋の中から

ふうと匂つた。聖母像や十字架を吊した壁、減裂の帷、填料も弾機も喰み出

した肘懸椅子などが、薄暗いラムプの光で見られた。

「お這入りよ。」

「否えもう。お就眠み。」

老女はそそくさと這入つたと思ふと、旋て復た扉まで引返して來た。ジョルジョの眼の先で、持つて來た紙包を倒さに振つて、掌の上へ砂糖の粉を篩ひ出した。

「ね。是つ限残つてなう。」

「ぢや翌日また……伯母さんお就眠み。さよなら。」

然う言つて伯母を残して來た。元氣は盡きた。腹は顛覆るやう、胸の苦しさも堪へがたい。

また露臺に出て見た。

満月は空の中央に懸つて居る。無感覺な氷山とも見えるマエルラの峯は、望遠鏡で引寄せて眺めた那の月界の表面に見える凸角かとも思はれた。グアルデアグレエルの町は、その山の裾野に眠り老けて居た。ベルガモットの香氣は、空氣を漲らした。

「イッポリイター！ イッポリイター！」此の憂悶の頂上に達した時、彼の全心は

戀しい女の方へ浮れ出て救助を叫んだ。

其の途端に、向うの窓から沈黙を破つて女の泣聲が聞えた。續いて多勢の泣聲もした。その迹は一しきり嗚咽が、唄を歌ふやうに高く又低く傳はつて來た。臨終の苦痛が今果てた。此の澄渡つた可傷しい夜の裡へ、靈魂が一つ溶け込んで行つたのであつた。

母は斯う言つた。

「是非お前に加勢して貰はなければならぬ。克く話して見ておくれ。克く那の夫に吞込める様に儼然お前から話して見ておくれな。何と言つたつて總領だもの。ねえ、ジェルジオ、それが正當ぢやないか。」

母親は口を休めず夫の不都合を敷へ立てた。父の恥を子の前に露出して話すことを厭はなかつた。父はもと家で召使つて居たぐうたら女の金に抜目のない下婢を妾にして圍つて置いた。父は此の女と私生兒のため、

他の者の事は思はずに身代残らず摺つて了つた。職業は那裏除けて資産は抛棄らかした。收穫物は人を見附け次第捨賣にして金を拵へることにばかり掛つた。時とすると夫の不檢束から家の人々が喰ふ物にすら困る事が出来た。一番季の妹が約婚してから久しくなるのに、持參金を遣ることも可厭がつた。異見する者があると、返辭には嘔鳴り附けるか惡態を吐くか有るまじい暴行も爲兼ねなかつた。

「お前は遠方に居る人だから私達が甚麼修羅場に居るともお知りの筈はない。些とても此の苦惱を想ひやるといふことは出来ない。だが、とに斯く總領のことだし、お前でなくては話もして貰へない。ねえ、ジェルジオ、お頼みだからね。」

ジェルジオは下を向いて無言で居た。此の不幸を思ふと言ひやうもなく可傷しい心になる。神經がすべて逆立つかの感じがする。それを制へることは容易ならぬ努力であつた。奈何だらう是が自分の母だらうか。

扭れた口には苦い物が溢れて居る。それが野鄙な物言ひをする度毎に烈しい痙攣を起す。これが母の口だらうか。悲惨と忿怒とは、斯うも彼女を變化させたか。——彼は眼を矯げて、母の顔面に昔の優しい面影を探らうとした。母は優しい女と以前は深く信じて居た。美しい可憐しい人であつた。ジョルジオは子供の時も、少年の時も、心から此の母を大切にした。その頃のシルヰリア夫人は娉婷とした華奢な體附き着すいたデリケエトな顔立をして居た。大方ブロードの髪黒い瞳。すべてが由緒ある家柄を想はせるやうな人柄であつた。其もその筈だ。彼女はスピナ家の出て、その家の定紋は現に此のアウリスバの家と同じやうに、サンタ・マリア・マッジョレの御堂の玄關に雕附けられてある。情の濃かなことも、何時とて渝らなかつた。それなのに何故の斯の變化だ。險相な舉止、苛辛い言語、根深い怨恨に荒れすさんだ外貌、それらは一々子の心を搔筆つた。又それ程の醜汚に包まれた我が父、此の生命を授けた二人の男女の間に物凄く喘ぐ淵、それに

も同様の感じがする。して何たる此の生命だ。

母は突込んで來た。

「お解りかい。ジョルジオ。お前餘程儼然してくれなくては困るよ。何時話して見ておくれだ。量見を決めておくれな。」

彼は母の言葉を聽いて、臟腑の底に一種の痙攣的な恐怖の顫へを感じた。で、心の中で斯う言つた。

「それはもう、お母さん、私へ甚麼事をお頼みになつてもようござんす。甚麼無理な犠牲を強ひられても厭ひません。——が、今度の事件だけは許して下さい。私は臆病者ですから。」父と面と向はねばならぬ、勇氣の要する事件をわが意思で片附けねばならぬ。——然う考へるにつけて、睫毛を振る程、可忌な氣持が湧いて來た。それ程の思ひをするなら、隻手を斫られた方が、甚麼に優しか知れない。

沈んだ聲で斯う答へた。

「承知しました。お父様に話して見ませう。好い機がありませうから。」  
母の腕を捉へて頬に接吻したが、それは心にも無い嘘を詫するかの態に見えた。直ぐ心の裡では、

「好い機なんて有る筈はない。話するやうな時はあるまい。」と思つた。  
母子は窓の口に静として居た。母は窓の扉を開けて、

「あれ、ドンデフエンデシオリの死骸を擔ぎ出すらしい。」

二人は寄添つて露臺に凭れた。と、母は空を瞻上げて、

「何といふ日だらうねえ。」

グアルデアグレエルの石の市街は、静穩な五月の日に煌々と輝いた。新しい軟風は、樋嘴の草をざわ立てた。サンタ・マリア・マッジョレの御堂は、礎から頂上まで罅隙といふ罅隙を、無数の并オレット色の花を著けた、細かい匂やかな草で裝飾された。藍碧の空に聳り立つた此の古い大寺は、大理石の花と生眞の花とで二重に裏まれたやうに見られた。

ジョルジオは考へた。「イッポリータにはもう遇へまい。暗い前兆が種々ある。五六日する中には、二人の夢の隠れ家を探しに行くことにはなつて居る。併し、同時にそれが無効に了る事も知れて居る。多分何事も成立つまい。眼に見えない障礙に撞突りに行くやうなものだ。何といふ不思議な形容の出来ない感じだらう。俺が洞看くのでない。何者とも知れない者が俺の體に宿つて居て、萬事が駄目になりさうだと洞看いて居る。」

又考へた。「イッポリータからは消息もない。此地へ來てから唯だ二度、簡単な電報が來た限だ。——一度はバルランツァから。一度はベルラジオから。俺は彼女と然う遠く離れて居るとは思はなかつた。大方今頃は外の男が、彼女の機嫌を取つて居るのだ。戀は女の胸から悉皆一時に脱落するものだらうか。然うでないといふ譯はあるまい。彼女の胸は疲れた。アルバノでは葬られた記憶が新たにされた爲に鼓動はしたらうが、多分それが最後だつたのであらう。俺は買冠つて居た。併し或る出來事その物には、皮

相とは關係のない秘密の意味が含まれて居る——此の出来事を抽象して考へる事の出来る人には、克く解る。善し。アルパノての日々の些細な出来事を、それからそれへ思ひ合せて見ると、疑ふ餘地のない意味と、明白な證據とが浮出して来る。其處に終局がある。受苦日の晩方、羅馬の停車場へ著つて、暇乞をして、それから馬車で彼女が霧の中へ消えて行つた時に、それが既う永久の訣別だといふ氣がしたてはないか。何事も終極だと、深い覺悟もしたてはないか。』空想に浮んだのは、最後の接吻の後で、黒い面帕を引卸した時のイッポリイタの素振であつた。そして、太陽も、濃碧も、花も、——然のあらゆる歡喜は、唯彼に此の確信を憶ひ出させるだけであつた。——」彼女が無ければ、ライフは自分に不可能だ。』

此の間に母は欄干に凭掛つて、會堂の玄關の方を見入つて居た。

『行列がお寺から出て来る。』

葬禮の講中は、徽章を立てて玄關から離れた。頭巾を被つた男が四人し

て棺を擔いで歩いた。同じ頭巾の男の列が二行に、火の點つた蠟燭を提げてその迹へ隨いた。頭被の二つの孔から、眼ばかりが漸く出て居た。微風が絶えず戦ぐ度に、悄乎と有るかないかに點つた火をちろちろさせた。消えて行くのもあつた。蠟燭はじりじりと流れて耗つた。頭巾の男の側に、一人づつ跣足の子供が跟いて、兩手の窪の中へ熔けた蠟を拾ひ込んだ。

葬列が残らず街に展がつた時、紅い衣に白色の面覆を着けた樂人達は、一齊に送葬曲を吹奏した。葬儀社の社員等が、拍子に合して歩調を揃へた。黄銅製の樂器が、ざらざらと光つた。

『氣の毒だ。死者の名譽のためとは言ふて、又滑稽な話だ。』然う彼は思つた。偶と自分がその棺の中に這入つて居る人のやうな氣がした——板の間に挟まれて、假面行列に撥ばれて、蠟燭や喇叭の躁音に送られて——。然う思つて、忌だ忌だといふ氣に胸を塞がれた。すると又、注意は其の襤褸を被た子供等の上に牽かれた——痛々しさうに、ひよつくらひよつくら前

屈みの身體を歩かせて、我一に蠟涙を拾ふ氣で、轉瞬もせず、飄搖く火を凝視めて行く——。

「まあねえ、ドン・デフンデントも……。」葬列が遠くの方に見えなくなるまで見送つて、斯う呻くやうに言つた。

する内息子は、措いて自分と訴へるやうな口氣で、懈怠さうに附加へて言つた。

「何が氣の毒なものか。那の男はあれで安息の體だ。私達こそ哀れなものさ。」

ジェルジオは母を見た。眼と眼が出會した。母は微笑んだが、それは併し笑ひの心持を見せたといふだけで、顔面の筋肉が、一線でも動いたのてなかつた。丁度眼にも這入らない、薄い薄い面帕のやうに、年中悲哀の烙印を捺された彼女の顔に廣がつた。が、此の微笑の輝きが、心もち閃めいたと思ふことは、ジェルジオに取つては、或る壯大なイルミネーションが、一時に燃立つた。

と同じことに當つた。それと同時に、母の顔には、癒し難い絶大な苦惱の痕のあることが、際立つて見留められた。

斯うした微笑から察せられる可怖しい秘密を思ひ合せると、哀憐の波が、彼の胸にばつと噴上げた。わが生みの母なる人は、最早此の通りに——これだけしか笑ふことが出来なくなつたのか。して苦惱の烙印が可憐しい顔から消えないのであらうか。病むにつけ、悩むにつけ、是まで幾度も尋常ならぬ慈愛を含んで、彼を慰めに摺寄せて來たその顔が！此の生みの母なる人は、些しづつ身を殺して行つた。一日一日氣を腐らして行つた。避け難い墓場の方へ、じりじりと逐立てられて行つた。斯うして母が苦惱の呼吸を續けて居る間も、ジェルジオの煩悶の種は、母の悲哀その物ではなかつた。それよりも、母の悲哀が素地の儘で現れたために、彼の利己心は傷を負はされ、解弛けた神経はシオクを受けたり——其處に主な原因があつた。「ああ、お母さん。」涙に息を機ませて、吃り吃り言つた。



母の手を執つて、室に引張り込んだ。

「奈何お爲だ、ジョルジオ。ええ？ 奈何お爲だといへば。」 斯う訊いた母は、愕いた眼で、涙を浴びた息子の顔を眺めた。「奈何お爲だよ。解らないぢやないか。」

思ひ掛けなく今彼は復た那の可憐しい聲を聴くことが出来た。——那の類ひなく、忘れられない精神の底まで觸れる聲。安慰と、寛容と、慈訓と、善意とを含んだ、彼の闇黒の日に聴覚えたその聲——それを再び聴くことが出来た。それを聴くことが出来た！ これて昔の優しい人、貴い人といふことが知れて来た。

「ああ、お母さん、お母さん……」

両腕に母を抱緊めて、啜り泣く熱い涙に濕然と彼女を濡らした。狂亂した者のやうに、頬と言はず、眼と言はず、額と言はず、接吻し接吻しした。

「ああお氣の毒なお母さんだ。」

腰を掛けさしてその前に、踞つて凝と見入つた。長く長く見入つた態は、久しい別離の後に、初めて遇つたといふ風であつた。母は口を痙攣らせて、無理に堪へた歎歎に吭を塞らせながら、

「私が餘り心配させたからだらうね。」

母は子の涙を拭いた。頭髮も撫てた。其の迹で咳き上げるやうな調子の聲で斯う言つた。

「然うぢやない、ジョルジオ、然うぢやない。お前に心配を掛ける積りぢやない……。上帝はお前を此の家から遠くへお連れになつた。お前に心配を掛ける積りぢやない。私の一生は、お前が生れてから、ずつと今日まで些とでもお前に痛みの懸らないやう、一分でも難儀な目に遇はないやうと、そればかりに劬勞をしたやうなものだ。噫、それに奈何して今度ばかりは沈黙で辛抱して居られなかつただらう。何も言ふ筈ではなかつた。お前の耳に入れる所ではなかつた。勘辨しておくれ、ジョルジオ。這麼迷惑が懸つて

行かうとは、全く気が注かずに居た。もうお泣きてない、ねえ後生だから。ジョルジオ、後生だからもう泣かないでくれ。お前に泣かれると、私はもう見て居られない。」

彼女は心の痛みに打負けて、悲嘆に沈みかかった。

「見て下さる。ジョルジオが言ふ。」もう此の通り泣いちゃ居ないでせう。」母の膝に頭を靠せると、母の指尖の媚態の下に、旋て心は落着いた。間を置いては、戯歌が彼の體を揺ぶつた。又しても遠い少年の憂苦が、漠然とした感覺のやうな形で、心の中を抜け通つた。燕の囀り、研屋の軋音、衢の鋭い叫喚——それは世を隔てた昔の午後に、克く聽馴れて、始終氣を遠くさせられた聲であつた。激動の後、彼の精神は言ひ様もない動搖の態にあつた。けれど、イッポリイタの儂が復た浮出した。尋常ならぬ胸騒ぎが、全身を扛起るやうに感じて、思はず溜息が母の膝に突走つた。

母は彼の顔の上に伸懸つて、

「まあ、何といふ溜息だえ。」と呟いた。

目眶も矯げずに莞爾彼は笑んだ。併し異大な衰弱が全身に冠さつて来た——懈けるやうな疲勞、此の休息なき闘から手を退かうとする絶望的な願ひがそれであつた。

生きようとする欲は、ぼつぼつ彼を離れて行つた。熱が徐々に死體から離れるやうに。

今の先の感情は、既う何も残つて居なかつた。母は復も自分には他人と思はれて来た。「母の爲にと言つて何が出来よう。母を救ふ？ 再び平和を齎す？ 健康と幸福の回復？ と言つて禍は償ふことが出来ないではないか。従つて此の女の生活は、永久に毒を注されて居るではないか。母と言つても、子供の時分のやうに、過ぎ去つた頃のやうに、彼の爲の隠れ家となることは既う出来なくなつて居る。彼を理解する慰和する治療するすべて彼女に望まれない事だ。母子の精神も、生活も、餘りに異り過ぎて居る。

彼女に出来る事は、唯自分の苦む有様を子に見せるだけだ。」

起上つて、母を抱いて、又立離れて出て行つた。自分の室へ登つて行つて露臺に凭掛つた。マエルラの山を眺めると、殘照に淡紅を染めて、居丈高に綠色の空を凌いで居るのが、如何にもデリケートに見える。耳を聳ひさせる程燕が啼いて飛廻るので、餘儀なく室に引込んだ。寢臺の處へ行つてごろりとなつた。

仰向けに寝轉んで熟々考へた。「まあ斯うして生きては居る。呼吸もして居る。が此のライフの核心には何かがある。如何なる勢力に支配されて居るだらう。甚麼法則があるのだ。己は己の所有てない。——己は己から脱離して居る。自分の身に就いて感ずる心持は、喩へば遊動板の上で真直に立つて居る人が、足の位置を奈何換へても、頼りない心は毎も變らないのと同じやうなものだ。俺は永久の悶々に閉ぢられた。しかも、何と名づくべきかすら分らない。何者かに追掛けられると思ふ逃亡者の悲哀か。何

時までも追附き得られない追跡者の悲哀か。或は兩方かも知れない。』

燕は黒い箭のやうに、露臺で出来た蒼い矩形の前を飛交ひつつ囁つた。

「何が俺に物足りないのだらう。俺の精神生活の空隙は何だ。氣力の盡きた原因は何だ。俺には生きたいと思ふ非常に高い欲情がある。自分の性能に一々節奏的な發育を遂げさせたいとも熱望する。諧調的に完成された身だと感じたくも思ふ。が事實はその反對で、日々竊かに己自身を破壊して居る。一日一日眼に見えない、數へられない劈痕のために、此の生が斷滅して行く。俺は水の半分這入つた膀胱のやうに、水の動く度毎に、甚麼風にも形狀が變る。全身の力を罩めて見たところ、倦怠の烈しさに、塵一本扛上げる程の事すら出来ない。妄想が此の塵に大岩石の重量を嘘込ひからだ。間斷なき争闘はすべての考想を動亂させ、頽廢させる。俺の物足りなく思ふのは何だらう。俺の身體には意識の及ばない部分がある。何者が其處を占領して居るのだらう。が、其の部分とても、ライフを續ける

上に無くてならないことは明かに感じられる。斯うした生命の一部分は、恐らく既う死んで了つて居るのかも知れない。すれば此の部分を恢復するには死より外の方便はない。うむ。必と然うだ。ともあれ死には牽附けられる。」

サンタ・マリア・マッジョレの鐘は晩拜を告げた。もう一度彼は葬列を眼に浮べた。臥棺や、頭巾の男や、襁褓を被た子供等——那の痛々しさうに、ひよつくらひよつくら前屈みの身體を歩かせて、我一に蠟涙を拾ふ氣で、轉瞬もせず、飄搖く火を凝視めて行く——。

此の子供等は深い印銘を彼に與へた。後になつて戀人に手紙を出した時、幻影を好む彼の心に混亂して映つた不思議さを、次のやうに敷衍して書いた。

「彼等の一人に病身らしい黄色つぼい貌をしたのがあつた。隻腕は柺杖に縋つて、空手の方の凹處に蠟を受けながら、男の側に引添つてよちよちと

行つた。男は頭被をした巨人とも見えて、嚴い握り拳は、蠟燭立を驚掴みに握つて居た。此の二人は今でも髣髴と見えるやうだ。是からも忘れられないだらう。何となく此の子供に似たやうな點が僕にもあるやうに思ふ。僕の實生活は、何者かの權威の下に在るのだ。神祕な、不可知な何者かに、それが驚掴みにされて居る。そして此の生活が次第に斷滅して行くやうな氣がする。自分は唯よちよちとその側に引添つて行くばかりだ。たつた二三滴の蠟涙を拾ひ込まうとして己を疲らせ、流れ落ちる滴毎に悲慘な掌を焼け爛らせて居るのだ。」

卓子の花瓶には妹のカミルラが庭で採つた、いきいきした五月の薔薇が一朶差してあつた。其の四邊を圍んで居るのは、父と母と弟のデエゴとカミルラの約婚者で、晚餐に招かれて来たアルベルトオと、姉のクリステイナと、その夫と子供と、それだけであつた。此のブロンドの子供は、雪のやうに白い顔をして、咲きかけの百合程に脆く見られた。

ジョルジオは父と母の間に席を取つた。

クリステイナの夫のバルレアウレア男爵、ドン・ポルトロメオ・チェライアが、

三

丁度苛立たしい調子で、市治の話を爲掛けて居た。五十近い、乾き切つた、刺落したやうに頂邊の禿げた綺麗に顔を剃つた男であつた。横柄な毒々しい態度は、宗教家らしい容貌とは釣合が取れなかつた。

其の言葉を聴き、細かく觀察するにつけて、斯う考へられた。

「那麽男と連添つたクリステイナは幸福だらうか。那て男が可愛くなれるだらうか。可哀さうなものだ。那の情深い沈鬱な女が無慈悲な老耄の愚にも附かない暗闇に意地の曲つた田舎の政治屋に縁附するとなつた時は、いぢらしい心に堪へ性を失つて、幾度泣仆れたか知れなかつた。それに子の母となりながら、母としての慰安も得られない身だ。那麽病身な貧血性の、悩いてばかり居る子供に係つて、切ない拷問を受けてゐるのだ。可哀さうなものだ。」

彼は深切な同情に溢れたやうな顔をして姉を見た。クリステイナは薔薇の花越しに、心持首を左へ傾げて、持前の愛嬌のある態を見せながら笑み

返した。

姉の傍にデエゴオが居た。ジョルジオはそれを見て、『那の二人が同胞とは誰の眼に見えよう。クリスチイナは母の愛嬌を多分に遺傳した。眼元も酷肖だ。殊に所作から身振が全出だ。ところがデエゴオと来ちや……。』弟を見廻す心には、血統の異つた矛盾を持つた凡てに反対な人物を見て感ずるやうな本能的の反撥があつた。デエゴオはまるで口の方に氣を奪られて、顔を碟に附着けたままばかり喰つた。尙だ二十歳にもならないのに、ぶんぐりと脂肪が乗つて血の氣の盛りを顔に見せて居た。平夷い顔の奥の、どんより濁つた小さい眼には、奈何見ても聰明の光らしいものを認めることが出来なかつた。黄色い毳毛が兩の頬と岩壘な顎に茂り合つて、突出つたセンシアルな口の上に影を投げた。其の毳毛は手にもあつた。手入れの悪い爪は身嗜みを厭ふ證據になつた。

『這麼者が何處が可愛からう。無意味な一言を話し掛けるにも眞の挨拶

の應答をするにも身體中が可厭がるのを無理に制へなければならぬ。俺に話をすると言つても、眼を見合したことがない。偶と撞突することがあると、彼奴妙に周章して傍へ反らせる。始終俺には顔を赧くして居る。是といふ原因が解らない。俺に對して甚麼感情を持つて居るのだから知りた

いものだ。俺を嫌つて居るに違ひない。』

自然に考へは父の方へ移つて行つた。デエゴオは父の面影を一番餘計に傳へて居た。

てぶてぶした血の氣の多い力強い父は、暖い肉の生氣を、全身から際限なしに噴出して居るらしかつた。顎の岩壘な唇の厚い、口元の横柄な息づかひの荒い、眼のぎよろぎよると險相な痣のある獅子鼻が瘡癩的に蠢く工合に、不平均な努力が見えた。ぶんぐりした身體の筋肉全體が溢切れるやうな脂肪と絶えず闘つて居るかのやうであつた。其の肉は奈何だ。血管と

7-26-1921

神経と臆と、腺と骨の通つたざらざらした肉。本能と情慾の溢れた肉。汗の流れる、悪臭の發する肉。畸形を成し、疾病を醸し、膿汁を迸らせる肉。皺と瘡と疣と毛で覆はれた肉。然うした野獸的な肉は、四下構はず彼に發育して來た。リフインされた人の眼には、打克ちがたい嫌惡を起させずには已まなかつた。「然うぢやない。」ジェルジオは獨りて思つた。「十年十五年前までは那でもなかつた。然うてなかつたことは判然記えて居る。紛れもない此の獸性は、人知れず徐々に發達し、亢進して來たものと見える。そして俺は——俺はその男の子だ！」

熱々と父を凝視めた。眼角や額鬚に多分の皺が寄つた。下脛が脹んで、紫色の水胞が出來た。短い頸は膨上つて充血して、卒中を想はせる。ふと髻と髪に、薬で染めた痕が讀まれた。歡樂の人の老い行く初期禍と、時との執念深い惡戯、衰への槌色を隠す徒な醜い虚飾、突如として來る死の脅し、——斯うした人生のなげかはしさ、可嘲しさ、可傷しさは、子の胸に深い悩みを

煽動てた。慈悲哀憐の大同情が彼の胸に流れ入つた。父に向つてすら然うであつた。「辱しむべきか。否。彼にも苦悶はある。是程自分を胸惡がらせる那の肉——那の重い肉の塊にも、精靈は宿つて居る。甚麼艱苦甚麼倦怠を彼が感じたであらう……彼にも確かに死の恐怖がある。」不意に、父の死苦の光景が心の眼に映つた。震撃に覆されて、激動を受けた。生きながら蒼褪めて、沈黙の裡に目に見えない程喘いだ。眼の中は死の恐怖に漂つた。續いて形のない大鎚で打下されたやうに、生氣を失つた一塊肉となつて、其の場で立縮んで了つた。「お母さんは泣いてるだらうか。」

母は言つた。

「何も喰べないではないか。御酒も飲まないし、何も喰べた物つてないぢやないか。氣分が癒れないのか。」

「然うぢやないんですけど。何だか今朝から食味がなくなつて。」

卓子の側で何かごそごそ音がすると思つて、顧眄つて見た。それは衰弱

した龜の子であつた。其の時彼は伯母のジ・コンダが言つた語を憶ひ出した。『私の摹似をして跋になつた。お前のお父さんが足踢に掛けて……』

疑と龜の子を視て居ると、母は瞥と微笑を見せて斯う言つた。

『これはお前と同じ齡だ。これを貰つた時は、丁度お前がお腹に居た。』

同じやうな微かな微笑とともに、『それやあ最初は小かつた。甲羅などはお前透明つてて、まるで玩具みたいさ。それからずつと此の家で育つて、一年増しに這處にまで生長くなつた。』

母は林檎の切殺を興つて見た。痛々しい動物を暫時眺めて居ると、龜は黄色く舊びた、蛇のやうな頭を出して眩暈がすると言つた風に顛へた。それから母は夢心地でゾルジオの爲にオレンジの皮を務き始めた。

『昔のことを思ひ出して。』我を忘れた母を眺めて斯う考へた。言ひ現せない母の悲哀を想像して見た。疑ひもなく此の悲哀は、幸福な時代を憶ひ出すにつけて母の心に這入つて來た。その頃に比べれば、今の零落はど

ん底に落ちて居る。夥しい虐げ、夥しい辱めを被つた一切のものは償ひ得られぬ損失となつて了つた。『舊は那でも那の男に愛されたものだ。母は若かつた。未だその時分は苦みを知らなかつただらう……胸の吐息も無理でない。甚麼哀惜も、甚麼沮喪も、母の臍腑から涌上つて來る道理だ！』

彼は母の頬ひを我が心に描いて見て、その頬ひ故に我と身を惱ました。長いこと彼は身體を据ゑて、微細な情緒の風味を何處までも味ふといふ風であつた。には涙の面帕が眼に翳つて來た。おつとその涙を制へて居ると、何となく腹の中へごく靜かにぼたぼたと落込むやうな感じがした。『噫、お母さんがこれを知つたなら！』

這箇を顧ると、クリスチーナが薔薇の花越しに彼を見て婉笑して居る。

カミルラの約婚者が、その時丁度這處ことを話して居た。

『だから、民法の第一條も知らないといふやうなことを言はれるのですよ。若し要求に依つて……』



男爵は此の年若なドクトルの議論を讚嘆して、一語いふ度に、「真箇だ。真箇だ。」と繰返した。

彼等は市長を攻撃して居るのであつた。

年若なアルベルトは許嫁女の側に腰を掛けた。洒落た姿をして、淡紅を帯びた白い顔に、蠟人形を想はせた。鼻髭は小くて尖つて居た。直線に頭髮を分けて、二三本媚婦めかした茶れ毛を額のところへ捲附けて居た。金縁の眼鏡が鼻の左右に乗つて居た。「那がカミルラの理想だ。何年間といふもの、二人は互に全力を入れて戀し合つた。未來の幸福を疑はないで居る。アルベルトは此の小娘を引張つて、山村のあらゆる凡俗の社會に出入したに極まつて居る。カミルラは頑強者ではない。自分で拵へた劬勞に憊む女だ。朝から晩まで何も爲事はしないで、唯小夜樂を弾いては戀人を弱らせるばかりだ。聽て二人は結婚するだらう。その將來が奈何なることか。ふわふわした空虚な青年と、センチメンタルな若い娘とが小い

田舎の世界で……」彼は斯うした二人の平凡な生活を暫時頭腦の中で展げて思ひ遣つて見た。妹を憐む心に動かされた。妹の方を見た。

形の上から幾らか妹は自分に肖て居た。細つこい娉婷とした褐色の頭髮の美しい娘であつた。眼は明るくて、縁にも、青にも、灰色にも變つた。薄くチブリアを抹いたために、餘計顔を蒼白く見せた。胸に二朶薔薇が挿してあつた。

「依樣彼女も姿貌の外に、俺に似た所があるのだらう。自身は知らなくても、俺の意識の上に這處に強く擴がつた可怕しい幼芽が彼女の心にも幾つか宿つて居るに相違ない。那の胸も、必と相當な煩悶と鬱憂とで満ちて居る。何が因といふことも無しに可惱しくて居るのだ。」

其の途端に母は起上つた。皆ながそれに跟いて行つた。残つたのは父と、ドン・ポルトロメオチユライアとであつた。二人は卓子で話し續けた。それがジオルジオにはまた氣に喰はなかつた。彼は情深く隻腕を母の腰に、隻

腕はクリステイナの腰に懸けた。斯うして一緒に次の室へ這入つたが、ジョルジオが母姉を引摺つて行つたやうなものであつた。彼は異しく優しい同情で、胸が一ぱいになるやうな感じがした。カミルラの弾き始めた小夜樂が二三小節を行つた頃

「姉さん庭へ出て見せせんか。」とクリステイナに問うた。

母は許嫁の夫婦の傍に残つた。クリステイナとジョルジオは降りて行く。迹へ陰氣な子供が跟いて行つた。

暫時二人は言葉もなしに寄添つて歩いた。毎もイッポリイタにするやうに、ジョルジオは姉の腕を取つた。クリステイナは佇立つて、口の中で、

「何て酷い庭だらう。子供の時分に一緒に遊んだこと覚えてて？」

然う言つて自分の子供のルカの方を見た。

「ルキちゃん。ちつと競走して遊びてない？」

言つても子供は母の傍を離れようとしな。反對に母の手に縋つた。

母は嘆息した。ジョルジオの方を顧眄つて、

「これだもの。何時だつて斯うなの。駆けるでもなければ、遊ぶでもなければ、莞爾ともするんでないんだもの。私に附きつきりよ。離れるといふ心になれないんだわね。何を見たつて、それや可怕がるつてないの。」

離れて居る戀人の上に心が行つて、クリステイナの言つたことは、聽いて居なかつた。

庭は半分日が照つて、半分は蔭になつて居た。周囲の土塀の屋根にセメントで膠着けた硝子の斷片がきらきらとした。片側に葡萄蔓が紆つて走つた。片方には、同じ距離を置いて、蠟燭のやうに細そりと眞直なチブレンオが空高く立つた。見窄らしい、小暗い簇葉が、眞黒な槍の尖の形をして樹の頂からによきによき出て居た。南向きの日當りの良い地面には、オレンジヤ檸檬の幾畦が盛りの花を見せて茂つた。その外には、其處此處に薔薇や、リルラや香の高い草花が植わつて居た。長春樹も几帳面な距離を開け

て、あちこちに見られた。今日廢れた境界が此の木の栽ゑ方で見分けることが出来る。一方の隅に美しい櫻の樹がある。中央に暗い水の溜つた圓池があつて、鵲豆が生えて居た。

「ねえ覚えてるだらう。」とクリスチーナが、「お前さんが此の池へ陥つて、デメトリオの叔父さんに曳上げて貰つた時の事覚えてて？ 那の時はみんなが甚麼に吃驚したてせう。お前さんが救かつたのは奇蹟みたやうなものだつたわ。」

デメトリオの名前を聞いたジェルジオは、はつとした。それは可懐しい可懐しい名前であつた。それを聴くと極まつて胸騒ぎのする名前であつた。彼はぢつと姉に耳敬けた。水の面を眺めると、脚の長い蟲が、眼にも留らず跳廻つて居る。奈何しても此の故人の事が話したい、思ふさま話して見たい、彼の記憶をすべて喚生けて見たいと思ふ心が焦つて來た。けれども彼はその心を喰止めた——自我的の矜誇が偶と起つて、祕密は隠して置け、そ

して人の居ない處で心行く程味ふがよいと、然う耳元で囁かれるやうに思つたからだ。故人の記憶を喚生ければ、姉も同じやうに胸を撲たれるだらう。斯う考へることは、彼に取つては嫉妬に似た一種の感覺であつた。その記憶は自分だけの資産であつて、他人に分前はさせられない。彼はその記憶にわが精神との親みを作らせ、悲哀な、そして深刻な崇拜の念から、永久にそれを護つて居た。デメトリオは彼に取つて眞實の父のやうなものであつた。叔父は彼には唯一人の掛替の無い親であつた。

その叔父が彼に現れた——柔しくて考深い人、男性的な鬱憂を顔に瀝らした人、黒い頭髮の中から額の中央に白い捲髮が一條懸つて、そのために顔附の異つて見えるやうな人。

「這麼事もあつたわ。」クリスチーナが、「或る晩に、お前さんが一晩中何處か餘所へ匿れちやつて、朝まで姿を見せなかつたてせう。那の時だつて私達が甚麼に驚いたと思つて。それや捜したわ。哭くことも哭いたしさ。」

ジョルジオは寂しく笑つた。憶ひ出せば、那して身を匿したのは、酔興といふこともあつたにしろ、實は一種の残酷な好奇心から來たことだ——多くの人々に、自分が失くなつたと思はせて、その爲に號泣させようとしたのだ。當の濕潤を持つた、幽静な晩に、彼は自分を呼び廻る聲々を耳にした。噉々と家の方から來る響を、一つ一つ聽洩らさないやうに耳を引立てた。匿れて居る場所の近くを捜して廻る人達の姿を歡喜と恐怖に氣息を殺しながら窺察して居た。庭中草を分けて捜して見ても、効はなかつた。その時でも彼は依然靜と躡んで忍んで居た。する内家中に大混雜が起つた。それは、燈火の這入つた窓の前を、あちらこちらへ駈交ふ人影で見つた。その時は涙の滲み出る程、異しい感情に襲はれた。父母と己自身に對して悲しくなつて來た。正しく自分が失くなつたのかと思はれた。それ程に感じながら、依然飽くまでも頑固を通し切つた。その内朝になつた。光線は徐かに沈黙な無邊の野に流れ入つて、彼の頭腦から狂愚の霧を拂ひ

去つた。現實の意識が醒めて、悔恨がむらむらと來た。父のことを思ふに附けて、恐怖と絶望の間から譴責を思つた。偶と池の水に氣を遠くさせられた。何となくその空を涵した蒼ざんとした水溜に牽附けられるやうな氣がした。その水は幾月か前に、生命を投込んだ所だ……

「あれは叔父さんの不在中でしたね。」彼は復た憶ひ出した。

「那の匂分つて？」クリスチイナが言つた。「花把を拵へませうね。」

空氣は暖かな濕潤を孕み重たるい香氣を含んで、ぐつたりした氣分に入を誘つた。リルラ、オレンジ、薔薇、チイモ、茉沃刺那、羅勒、長春樹——然ういふ種々の花のエッセンスが互ひに糾れ合つて、更に一團のデリケエトな、力強いエッセンスを製り出した。

突然にクリスチイナが尋ねた。

「何爲那樣にお惚ぎなの。」

香氣は噉ぶジョルジオの心を懲つた。パッションが一時に烈しく蘇つて來た。